原爆復興70周年記念誌

― 証言　長崎医科大学 ―

平成28年1月

原爆復興70周年記念事業実行委員会

原爆復興70周年記念誌

― 証言　長崎医科大学 ―

平成28年1月

原爆復興70周年記念事業実行委員会

ごあいさつ

長崎大学原爆復興70周年記念事業実行委員会　共同代表
長崎大学医学部長　下　川　　功
長崎大学原爆後障害医療研究所長　永　山　雄　二

昭和20年8月9日午前11時2分の原子爆弾投下から今年で70周年を迎えました。医学部長及び原爆後障害医療研究所長が共同代表を務めさせていただいて記念事業を計画し、多くの方々からご支援をいただき、無事に事業を終えることができました。皆様方からのご支援で、まずキャンパス整備として、グビロが丘の整備と医学部キャンパス中庭への献花台の設置、被ばく遺構の移設を執り行うことができました。これらは原爆慰霊祭の際にお披露目させていただきました。また原爆復興60周年記念事業に続き、写真・資料展示を行い、今回は旧佐賀県立病院（現佐賀県医療センター好生館）における被爆者診察記録と、故調来助博士が中心となり原爆投下直後に実施された約6,000人の原子爆弾災害調査票が新たに展示に加わりました。いずれも医学的に貴重な資料です。展示期間中には1,200人もの多くの方々にご見学いただき、この場を借りて感謝申し上げます。その他にも思い出の手記「忘れな草」の復刻版の作製・原子爆弾救護報告書修復等多くの実りある事業を行うことができました。長崎・広島では被爆者の平均年齢も80才近くなり、長崎医科大学原爆遺族者の方々もさらなる高齢化を迎えています。今後長崎医科大学の被爆の歴史、さらには長崎・広島の被爆経験をどのように継承していくか検討が必要と考えます。今後とも引き続きのご助言・ご支援をお願いいたします。

以上簡単ですが、お礼の言葉に代えさせていただきます。

2015年12月25日

■目次

ごあいさつ

長崎大学原爆復興70周年記念事業実行委員会　共同代表
長崎大学医学部長　下　川　　功
長崎大学原爆後障害医療研究所長　永　山　雄　二 …… 3

第１部　原爆犠牲者慰霊祭　追想講話

平成15年度　宮崎　トミホ …… 7
平成16年度　中村　恒寿（※）
平成17年度　角尾　澄夫 …… 10
平成18年度　米村　博臣 …… 12
平成19年度　濱里　欣一郎（※）
平成20年度　難波　雄哉 …… 15
平成21年度　井手　一郎 …… 17
平成22年度　築城　士郎 …… 19
平成23年度　土山　秀夫 …… 21
平成24年度　郡家　徳郎 …… 24
平成25年度　井石　哲哉 …… 27
平成26年度　椿山　政子 …… 29
平成27年度　朝長　万左男 …… 32

（※）は、原稿所在が不明のため掲載できませんでした。

第２部　原爆復興70周年記念事業

事業の概要 …… 37
献花台の設置 …… 38
被爆遺構の移設 …… 39
グビロが丘の環境整備 …… 40
「原子爆弾救護報告」の修復 …… 41
「忘れな草」復刻版の作成 …… 42
「原子爆弾災害調査票」の移管 …… 43
長崎医科大学原爆被災写真・資料展 …… 44
映画「母と暮せば」公開記念企画展 …… 65
報道 …… 66

編集後記 …… 70

第1部

原爆犠牲者慰霊祭追想講話

平成15年度8月9日講話

宮崎（みやざき）　トミホ

宮崎トミホ様のご紹介

宮崎トミホ様は、昭和17年に長崎医科大学附属看護婦養成所を卒業後、同附属医院看護婦として勤務、昭和23年園田助産所勤務、昭和33年に再び本学部附属病院看護婦となり、昭和35年に助産婦、昭和48年に副看護婦長、昭和52年に看護婦長となられ、昭和56年に大分医科大学附属病院副看護婦長として昭和61年のご退官まで約35年間にわたり看護業務を通じて大学病院の充実・発展にご尽力になられておられます。

それでは追想を宮崎トミホ様からご頂戴いたします。よろしくお願いいたします。

只今紹介された宮崎でございます。

当時、私は十九歳。長崎医科大学附属病院の看護婦で調外科病棟勤務でした。

戦争が激しくなって、夜となく昼となく敵機襲来が有り、昭和二十年八月一日には大学病院も直撃弾を受けましたので、重症の患者さんを残して軽症の方々には退院していただきました。調外科病棟では病室別の受持ち制で仕事をしていましたので、警報が出ると看護婦は自分の受持ちの病室で患者さんと共にベッドの下に避難していましたが、看護婦の不安も大きく、八月一日以降は警報が出ると、病棟の地下室に患者さんを移していました。

地下室には浴室・洗濯室・倉庫がそれぞれ二箇所あり、荷物を片付けるとやや広い場所が取れ、一箇所に患者さんを集めることができました。

八月九日朝八時頃、空襲警報が鳴ったので、患者さんを地下室へ避難させました。

九時ごろには警戒警報に替わりました。そこで入退院名簿の整理のため、私だけが看護室に戻り、先生方や他の看護婦は包帯交換などのために、地下室に残っていました。

看護室に置かれている私の机の場所は暗く暑かったので、窓際に置かれた机で仕事をしていました。

しばらくすると爆音が聞こえてきました。警戒警報なのに爆音がするのはおかしいと思い、机の下に屈みました。その瞬間、背中を何かに打たれ息がつまりました。周りは真っ暗となり、体が埋まり身動きが取れません。「直撃を受け、生き埋めになったのだ。早くここを抜け出してみんなが居る地下室へ行こう。」と焦りましたが、どうにもなりませんでした。恐る恐る手足を動かし、少しずつ体を捩りながら這い出しました。どの程度時間が経ったのか分かりませんが夜が明けるように辺りがぼんやりと明るくなり、自分が居る場所がわかりました。看護室内の廊下側の窓辺にいたのに廊下の外側の窓際まで吹き飛ばされていました。血が背中から腰の方へ流れてきたので手で抑えていました。古屋野外科の病室で看護婦と医師が動き叫んでいましたが、私は口の中が乾燥し、声を掛けようにも声を掛ける事ができませんでした。廊下には瓦礫が一杯でしたが、足場の良い場所を探しながらやっとの思いで地下室にたどり着きました。

地下室では積み上げていたマットレスが患者さんの上に被さり、その上に天井が落ちていましたので、みんな無事でした。ただ、足りなくなった薬品を取りに1階の治療室に行った看護婦の田中さんと河田さんが戻って来ていませんでした。

洗濯室の蛇口をひねると水が出ましたので、口をすすぎタオルを濡らして患者さんの顔や手足を拭いていました。

階段の方から煙が入って来、煙の合間に焔も見え熱くなってきます。日高先生が「動けるものはとにかく出て、様子を見よう。」と言い、看護婦を地下室から連れて出ることになりました。私は動けない患者さんと共に一人残っていましたが、ふと気づくと私のモンペのすそを持っている看護

婦がいました。矢口さんといい、「逃げられない」と震えていました。入院患者に付き添っていた兵隊さん（この方は、去る四月二十六日長崎駅付近の機銃掃射で負傷し入院していた下士官の付添いでした。）が「木田さん、危ないから僕の鉄兜を持って矢口さんを連れて逃げなさい。」と言ってくださり、患者さんには申し訳ないと思いながら矢口さんを引っ張り外に出ました。

病院の玄関の方へ出ようとしましたが、燃えていて行けませんでした。隣の産婦人科の病棟まで行くと怪我をして転げ落ちてくる先生もいて、地獄絵そのものでした。産婦人科の横に北講堂があり、そこを伝って小児科の方へ行きました。

現在の平和記念像がある付近は火がごうごうと燃え、まるで火砕流が迫ってくる様子でした。反対側の穴弘法寺の方はまだ緑が見えていましたので、そちらに逃げようと思いました。皮膚科の地下室まで行った時、青ざめて立っておられる満島婦長さんにお会いしました。「患者さんを外科の地下室に残しています。」と言うと「いいから早く山の方へ」と指差されました。これが満島婦長さんとの最後の別れになりました。

精神科の病棟から穴弘法山を目指して這うように登りました。

皮膚が焼けて赤く剥がれ垂れ下がった人、全身裸の人もみんな山を目指して、蟻の行列のように登ります。矢口さんの手を握りしめながら、「田中さんは、河田さんは」と探しながら私たちは登りました。

穴弘法山を越え西山の民家が見える付近で、調外科の看護婦たちと出会いました。

休暇で自宅におられた皮膚科の一瀬先生が買い物篭に薬を入れて回って来られたので、私は背中の傷の消毒をしていただきました。動くと少しずつ出血していましたが、次の朝には止まっていました。胸が痛くて呼吸するのも辛く座って一夜を過ごしました。二カ月後、大村海軍病院で、背中のガラス破片摘出のためにとったレントゲン写真で肋骨骨折していたことが分かりました。また、矢口さんには背中に刺さっているガラス片をピンセットで抜いてもらったことを被爆五十周年の慰霊祭の時に知りました。

八月九日の夜は、爆発する音、空中で炸裂した爆弾で明るく不気味で不穏な夜でした。

翌日、病院の見えるところまで山を降りました。浦上の町はまだ火の海でした。

水を汲むために穴弘法寺へ寄ったら、村山婦長さんにお会いしました。婦長さんはやけどのため話をするのもきつそうで、只頷くのみで横になっておられました。タオルで顔を冷やし、水を飲ませ、足を撫でることしかできませんでした。

病院を見に行った看護婦から「田中さんは治療室で動けなかったが無事でいる」との報せがあったので、私も病院へ行きました。治療室は材木とコンクリートが散乱して入れません。材木の間から河田さんのモンペが少し見えましたが、鉄骨の下敷きになり動かすことができませんでした。田中さんは救出されてそこにはもうおりませんでした。後日、田中さんは熱風の来る治療室で「もうおしまいだ。」と考えながら一夜を過ごしたと話していました。

病棟地下室に残った患者さんは皆無事でした。付き添いの兵隊さんに河田さんのことを話したら、見に行かれ「遺体は動かせなかった。」と毛髪とモンペの一部を切り取って持ってきて下さいました。河田さんの非常袋の中に入れ家族の方に渡すまで大切に持ち歩きました。

十日、十一日は木戸先生と病院玄関、高南病棟辺りの地下室、防空壕を大きなケッテル缶を持ち、負傷者の手当てのため一日中走り回っていました。また、滑石町で救護所を開くために大学職員や学生たちの名簿作りもいたしました。

十一日の夕方から、滑石の調先生宅へ向かいました。道には人や馬が異常に膨れ、ものすごい腐敗臭をだして倒れていました。その中を、疲れて体が重く「もうどうでもよい」と思いながら、とぼとぼ歩いていきました。調先生のお宅は長男の方の負傷で大変な中、私たち十数名の食事等のお世話をしていただき大変ありがたかったです。

被爆から四日目の十二日から滑石大神宮と岩屋クラブ（公民館のような場所）で調先生を中心に救護所を開設し、治療にあたりました。

高熱を出されていた角尾学長と山根教授には、滑石大神宮の拝殿に休んでいただきました。山根先生は時々痙攣を起こし、破傷風かと思われ音を立てないように注意しましたが、参拝に来られる方の鈴の音にも発作が起きました。

看護婦は給食班、外来班、病室班、大神宮班、当直の五班に分かれ仕事をいたしました。

外来班は午前中、傷の手当てに来る人を介助し、午後は医学生や医師と二人一組になり近所の往診に出かけました。往診の途中、飛行機が来襲しあぜ道に身を隠したこともありました。

食事班は庭に石を積みかまどを作りましたが釜などは無く、付近に落ちていたバケツを川できれいに洗い代用しました。お米と醤油は町内会長さんのお宅から頂きました。野菜がなく困っていたところ、道ノ尾に疎開していた感化院の子供達が自分たちで作ったジャガイモ、南瓜、とうもろこし等を「看護婦さん、食べて！」と持ってきてくれた時は涙がでました。

この子どもたちは大学病院の近くの施設に入所し、よく傷を作っては治療にきていたので顔見知りでした。

医薬材料は、疎開しておいた医療器具と大学病院からリヤカーで運び出した数少ない衛生材料だけでした。一度使用したガーゼは、小川で洗い、煮沸消毒し、何度も使いました。

傷にうじ虫が付き、取り除いても翌日にはまた多数うごめいていました。収容した方が血便を出され、伝染病ではないかと部屋の隅に隔離したり、次々に亡くなられる方を、学生が田圃で火葬を行ったりしていました。担ぎ込まれた男の患者さんはガス壊疽で緊急手術をしなければなりませんでしたが、切断用の鋸がなく困っていたところ、薬局の川本先生が近所の家から大工用の鋸を借りてこられ、無事手術が行われたこともありました。

八月十七日にはアメリカ兵上陸の噂が飛び、山の方へ逃げる準備をしている方々が見受けられました。

私は十九日に郷里の天草へ帰りました。自宅の仏壇には私の写真が置かれ線香が煙っていました。

亡くなられた河田久枝さんとは同じ郷里だったので、河田さんのお母様に持ち帰った避難袋や毛髪・モンペの布切れをお渡しし、亡くなられた場所と状況を説明いたしました。お母様は二十一日に大学病院へ行かれたそうですが、治療室の場所は分からず玄関で消防団の方から不明者のお骨を分けてもらい葬儀をなされました。

八月末頃、河田さんのお母様がお見えになり「毎夜のように久枝が玄関に悲しそうに立っています」と涙ぐんでおられました。

九月の中ごろ、調先生から「新興善小学校の方へ出てくるように」と連絡があり出かけました。

そこで藤井先生から河田さんの遺体がそのまま治療室にあると聞いたので、先生方と焼け跡の大学病院に行き、庭に木材を組みその上で荼毘に付しました。お骨は顕微鏡の空き箱に納め看護婦さんの池田さんに届けてもらいました。

「その後は夢にも出なくなりました。」と河田さんのお母様からお便りがありました。

多くの御霊も河田さんのように家に帰って眠りたかったことでしょう。このような悲惨な出来事は二度とあってはならないし、風化させてもいけないことです。

今も体に残る傷を見るたびに、戦争はいやだと思いますし、被爆から半世紀以上過ぎた今でも、原爆の後遺症に怯えながら暮らしていることを考えると、核兵器の使用は絶対に止めてほしいと切に願います。

ご一緒に救護活動をした調先生、木戸先生他多くの原爆犠牲者のご冥福をお祈り申し上げます。

本日は私の拙い被爆体験談をお聴き下さいましてありがとうございました。重ねて皆様のご健康をお祈りいたします。

平成17年度8月9日講話

角尾（つのお）　澄夫（すみお）（昭和31年卒）

角尾澄夫様のご紹介

角尾様は、昭和31年に長崎大学医学部をご卒業後、昭和32年に長崎大学医学部第一内科に入局、昭和36年に同大学医学部第一内科助手に就任され、その後、山口県立中央病院内科部長、健康保険諫早総合病院内科部長、日赤長崎原爆病院内科部長、国立長崎中央病院臨床研究部長を歴任され、昭和55年に諫早にて「つのお内科」をご開業、以来永きにわたり地域医療の発展のためにご活躍されておられます。

それでは、追想のお言葉を角尾澄夫様より頂戴いたします。

よろしくお願いいたします。

原爆被災の痛ましい想い出から60年の歳月が流れました。当時の長崎医科大学、附属医専、附属薬学専門部、看護婦養成所の教職員、学生、生徒850余命の尊い命が一瞬にして奪われました。人類に幸福と富をもたらすと信じて疑わなかった科学の進歩が、思いもよらないような悲劇を生みました。マンハッタン計画の成果が広島と長崎の頭上で炸裂したのです。

8月6日、広島に一発目の原爆が投下された、翌日の新聞の「広島に新型爆弾投下、被害は僅少」という見出しを今もはっきりと覚えております。昭和20年8月初め、東京に出張していた父は、上京の際に定宿としていた、東京駅のステーションホテルが昭和20年5月の空襲で罹災したので、学生時代を過ごした谷中の実家に泊まっておりました。しかし、腹痛と下痢が激しいので、治るまで休養するよう、叔母や兄がすすめましたが、8月8日の大詔奉戴日に間に合うべく、8月5日に東京を発ちました。途中、原爆被爆直後の廃虚と化した広島を歩いて通過し、7日夜、疲労困憊し、憔悴しきった状態で帰宅しました。いつも威勢がよく、弱音をはかない父が、力なく語る広島の惨状は想像を絶するものでした。翌8月8日の大詔奉戴日には、学生、教職員に広島の惨状をつぶさに話したようです。しかし8月9日に、次の原爆投下の目標が長崎に決っていたことは知る由もありませんでした。8月9日、父は外来のポリクリの最中に被爆し、穴弘法の近くに避難しております。背中、左大腿および左手にガラスによる切創があり、調来助先生に処置していただきました。

被爆当夜は穴弘法の丘で過ごし、12日夜、調来助先生が臨時救護所を開設された、滑石大神宮の拝殿に搬送されました。しかし、軽いガラスによる切創しかないはずの父の全身状態は、衰弱が増強し、8月22日午前10時に帰らぬ人となりました。死の直前に、負傷した傷が化膿しないことと、全身の衰弱が強いことについて、今度の爆弾は通常の爆弾と違って何かがあると言っておりました。8月22日夜、通夜が営まれました。場所は今はない附属病院外来棟の階段の踊り場でした。真夏の夜のこと、蚊の襲来に備えて蚊取り線香の代わりに付近に散乱していた布切れを縄状に編んで吊るし、燃やしました。暗黒と静寂の中でかすかに燃え続ける淡い火種が不思議なまでに印象的でした。翌23日、告別式が同じ玄関ホールで行われました。古屋野教授の切々とした哀惜の情溢れる、優しく語り掛けるような弔辞を聞いているうちに、思いもよらない父の急死と周囲のあまりの惨状に涙も枯れ、茫然自失していた私どもは改めて、惜別の悲しみと寂しさをひしひしと噛みしめました。告別式を終えた父の遺体は裏の丘へ運ばれ、爆風で「く」の字に曲がった煙突の裡で、荼毘に付されました。遺骨を骨壷に納める際、内臓が完全に焼かれていないのを見た祖母は、父の遺骨を拾いながら「晋は元気な体で死んだ。病気で死んだのではないから、よく焼けないのかね」と独り言を言っていたのが、今でも耳に残っております。父は被ばく直後の広島を歩いて通過し、長崎で爆心地から至近距離にある付属病院の外来棟で被ば

くしており、その被ばく線量は如何ほどであったのでしょうか？外傷が化膿しないと不思議がっていた父の骨髄機能は全く廃絶していたのではないかと思われます。私が父と過ごしたのは14年の短い期間でした。記憶にある戦時中の父は、多忙を極め、日曜日も殆ど大学に出かけておりました。まさに、当時流行の「月月火水木金金」の毎日でした。夜中に空襲警報が発令されると、直ちに歩いて大学に向い、夜明けに帰宅しても、翌朝8時には再び出勤することもまれではありませんでした。戦時中の劣悪な生活環境の中で、今では考えられない、苛酷な日日に耐えることが出来たのは不思議な気がします。不滅を信じていた、国家体制が脆くも崩壊していく渦の中で、国民は何の疑いもなく懸命に生きようとしておりました。すでに父の齢をはるかに超えた現在、原爆により非業の死を遂げた父の無念さを思うと、残忍な戦争や原爆の惨劇を二度と再び繰り返してはならないと決意を新にするとともに、人間として、また医師として如何に生きていくべきかを考えさせられるこの頃です。最後になりましたが、殉職された教職員、および学生の方々の御冥福をお祈りするとともに、ご遺族の方々のご多幸をお祈り致します。

平成18年度8月9日講話

米村（よねむら）　博臣（ひろおみ）（昭和20年卒）

米村博臣様のご紹介

米村様は、昭和20年9月に長崎医科大学医学専門部をご卒業後、同年11月に同大第二外科に入局、昭和25年4月に長崎大学医学部助手に就任され、昭和29年4月に博士号を取得されました。その後、昭和34年12月まで逓信（ていしん）病院外科部長を勤められた後、「米村外科医院」をご開業、以来永きにわたり地域医療の発展のためにご活躍されておられます。

それでは、追想のお言葉を米村博臣様より頂戴いたします。

よろしくお願いいたします。

追想

ただいまご紹介に預かりました米村でございます。

私は、直接被爆はしておりませんが、原爆投下後の十一日目の広島市にて一泊し、更に投下後十一日目の長崎市に入りました。結果として二重被爆という事になったわけでございます。

昭和二十年八月十五日、日本全土に甚大なる損害と、数百万人の犠牲者を出して戦争は終結しました。終戦時、仮卒業の身分のまま海軍軍医見習尉官として、大阪海兵団医務部に在籍中だった私は、未だ任官前という事で、即日免官となりました。

十七日早朝、一刻も早く郷里佐世保に帰るべく、臨時の無蓋貨車に、身一つで飛び乗りました。止まるかと思えば、また動き、やっと動いたかと思うとまた止まり、粗悪石炭の濛々たる煙で、顔も服も真っ黒になりながら、漸く昼過ぎに広島に到着しましたが、遂に汽車は完全にストップしてしまいました。

何時発車するとも分からぬままに、駅舎もない廃虚同然の広島駅を出て、当てもなく市中を歩き回りました。一歩市内に足を踏み入れると、正に地獄絵さながらの光景でした。ボロボロになった綴れ服をまとった人々が、虚ろな目をして、憑かれた様にもうろうとして、歩いておりました。

荒れ果てた焦土のアチコチに、遺体を焼く煙が立昇り、異臭が鼻をつき、街角には男女の区別もつかぬ黒焦げの遺体が積み上げてあり、凄惨そのものでした。やがて夜になり、歩きつかれ、無蓋貨車に戻りましたが、真っ暗な町のアチコチで遺体を焼く火が、鬼火の如く慄然とするものがありました。

今まで空襲によって焦土と化した都市は、沢山見て来ましたが、広島のそれは、その凄惨さに於いて全く違った次元のものでした。長崎もこの様な状態になったのであろうかと、遠く長崎の恩師、駅まで見送ってくれた学友、看護婦さん達の安否を案じながら、夜空に瞬く星を眺めているうちに、次第に胸が迫り、暗澹たる気持ちになって、煤けた顔を、無念の思いが黒い涙となって、止めどもなく流れ落ちました。

翌朝、漸く汽車は出発し、門司からはおんぼろながら、普通の汽車になり午後五時頃佐世保に帰り着きました。

十九日は休養し、二十日早朝、長崎行きの汽車に乗りましたが、汽車は道ノ尾駅にてストップ。後は大学病院目指して歩きました。道ノ尾駅から大学病院までの無残な光景は、正に地獄絵そのものでしたが、その詳細は省略させて頂きます。

大学病院に上る道は、未だ整理されてはおらず、道の中ほどに何処から来たのか、馬の死骸が転がっておりました。病院のシンボル的存在であった二本の大煙突は、その一本が「く」の字に折れ曲がり爆風の物凄さを物語っておりました。

病院本館に入って見ますと、壁の各所に各教室や学生たちの生存者名や、死亡者の名前、消息を求める張り紙が沢山貼ってありましたが、中でも我が子の消息を求める切々たる文面には胸を打た

れました。

親友の野村君の消息を求めて、小児科病棟へ行こうとしましたが、大学病院は未だ破壊されたまま放置され、特に木造の中央廊下は完全に崩壊し、足の踏み場もなく通行不能でした。そこで高北・高南病棟に上る道を通り、小児科の方へ行きました。

構内には、何人もの御遺族らしい人が、肉親の遺体を捜索しておられました。

小児科病棟は、爆心地に最も近く対面しており、特に爆風が凄かったらしく、窓の鉄枠までも完全に吹き飛んでおり、友の消息の手掛かりは得られませんでした。呆然として、診療室跡の廃虚に佇んでいる時、偶然、森助教授が来られ、友の消息を聞く事が出来ました。それによると、診察に立ち会っていた彼は、爆風の直撃によって腹部に重傷を受け、腹膜炎を併発して、苦しみながら二、三日後に亡くなったとの事でした。

戦死を覚悟して出て行った私が生き残り、残った明朗闊達、純心そのものの好青年であった彼が、悲惨な最期を遂げるとは、私は言葉もなく、彼の為にと持参したウイスキーの蓋を取り、診察室の床に、溢れ出る涙と共に撒きました。

すっかり気落ちした私は、迷った挙句、片渕町の友人宅へ歩いて行き、そこで一泊し、翌日城山町の元下宿跡を訪ねましたが、残骸ばかりでその所在さえ分らず、一応佐世保へ帰りました。

再び長崎入りした私は、集って来た同級生の有志と、私達は今何をすべきか協議した結果、被爆後二十日近く経過しているにも拘らず、大学構内に遺体、遺骨が其の侭放置されている事を、どうしても看過する事が出来ないので、学長に早急に遺体の処理と遺骨の収集をお願いしようという事になりました。

併し「今、大学には人的にも予算的にも、その余裕がない」との回答を得ましたので、「では私達の手で行ないます」と申上げ、早速行動に移しました。

残留放射線の真の恐ろしさを知らなかったとは言いながら、それから毎日毎日、月余に亘って焼け跡に通い、遺体の火葬、遺骨の収集に明け暮れました。

引き取り手のない、身元不明の数十体に及ぶ遺体を、病室から、倒木の下から、倒壊した建物の中から、瓦礫の下から運び出し、散乱した木材を積み上げ、火葬に付しました。

真夏を経過した遺体は傷みがひどく、既に悉く腐敗しておりました。木造の看護婦寄宿舎は、完全に破壊焼失しており、遺体は既に白骨化しており、焼け落ちた木材の灰と共に散乱し、看護学生のものと思われる可愛い小さな頭蓋骨は、手を触れただけでボロボロと砕け散り、思わず涙が溢れ、合掌しました。その時の悲しみと、手の感触はいまだに忘れる事が出来ません。

収集した遺骨及び荼毘に付した遺骨を、何処に埋葬するかを協議した結果、私達が通称「グビロが丘」と呼んでいた、病院も基礎教室も見渡せる高台が最適であるとの結論に達しました。

丘の病院側斜面は、急な段々畑になっており、遺骨を運び上げるのが大仕事でした。石油缶や机を裏返した物に遺骨を盛り、汗にまみれ、手を傷だらけにしながら、何回も何回も往復して担ぎあげました。

当時は、食糧事情が極端に悪く、この重労働は、大豆粕や高粱飯の腹には凄く応えました。そこで空腹を満たす為、段々畑に残っていた痩せた甘藷、これを私達は「原爆薯」と呼んでいましたが、これを掘り出して、遺骨や灰を運んだ石油缶で炊いて食しました。

残留放射能の恐ろしさなど思いもつかず、数週間に亘って爆心地に近い大学構内や周辺地区を動き回り、遺体・遺骨に直接手を触れ、灰を救い、原爆薯を食べていたのです、要するに、二次放射線を浴び、触れ、食して体内にまで取り込んでいたのです。後日全員例外なく強い倦怠感、下痢その他の症状に悩まされたのも、その所為だと思われます。

大学病院及び基礎教室構内及び周辺にて発見した、身元不明の全ての遺体を、私達の手によって荼毘に付しましたが、その遺骨及び灰、さらには肉親の方々によって荼毘に付され、その全部を持ち帰れず、已む無く残されたと思われる遺骨を、

全てグビロが丘に運びました。その数は確認されただけでも、三百体以上は確実にあったと思います。

遺骨は大きな穴を掘って埋葬し、適当な倒木を探して『慰霊碑』と書いて建て、その前面には、何処からか吹き飛ばされてきたと思われる、平たい砂岩の敷石に、折れ釘にて『友此処に眠る』と刻んだものを配置しました。

併しこの碑は、二、三年後に大学当局によって撤去され、新たに現在の様な立派な慰霊碑となりましたが、現在の慰霊碑建設までの経緯につきましては、公表される事なく、何時の間にか倒木も敷石も取り払われ、何処かに処分されました。

その後伝聞する所によれば、これらは現慰霊碑の中に収納されているとの事ですが、定かではありません。

以来、原爆慰霊の日が巡り来る度に、あの時ご遺骨ご遺体に直接触れたこの手を合わせ、原爆の犠牲となられた方々の霊に対し、心からなる礼拝を行なっております。

現在、慰霊碑に祈りを捧げておられる方々も、この遺骨・遺体の処理収集に関する事実をご存知の方は、殆ど居られないであろうし、やがて私達の死によって、永遠に忘れ去られる事であろうと思っておりました。併し、何らかの形で書き残しておく責任が有るのではないかと思いまして、昨年、旧制長崎県立佐世保中学校29回クラス会誌『桂窓』に掲載いたしました。この記事が佐世保の井手一郎先生を経て、相川教授のお目に止まり、長崎医学同窓会誌『ぽんぺ』に掲載して頂き、また本日、皆様の前でお話をする機会を与えて下さいました事を、心から御礼申し上げます。

最近ある人から、「『ぽんぺ』を読んで、長年の胸のつかえが下りたような気がします。実は私の兄が、基礎教室で爆死し、骨を捜しに行きましたが、全て白骨化していて区別がつかず、誰の骨かわからぬまま持ち帰りました。心残りではありましたが、残された骨を全て収集し、埋葬された事を知り、安堵しました。有り難うございました。」とお礼を言われました。

例えお一人でも、その様に思って下さる方が居られたという事で、報われた様な気が致します。ブルトーザ等で、残骸と共に廃棄される前に、遺骨を処理出来て本当に良かったと、つくづく思っております。

私達が建てた慰霊碑の裏面に記した名前は、次の通りです。

浜里欣一郎・山本繁一郎・張　欽南・富崎十美夫・吉本博一・米村博臣　以上です。

拙いお話を、最後まで御静聴頂きました事を感謝致します。有り難うございました。

なお、『桂窓』二十一号に掲載された私の文の全文の『別冊』が、受付の方に、少し用意されておりますので、自家製の為、聊か不格好ではございますが、若し読んでやろうという方が居られましたら、ご遠慮なくお持ち帰り下さい。

平成20年度8月9日講話

難波（なんば）　雄哉（かつや）（昭和23年卒）

難波雄哉様のご紹介

難波様のプロフィールをご紹介させていただきます。

難波様は、昭和23年に長崎医科大学をご卒業後、第一外科に入局、その後、整形外科へ転科され、整形外科の中で日本における最初の本格的な形成外科診療に取り組まれるなど、形成外科診療の発展、充実に尽力され、昭和54年10月初代形成外科教授に就任されました。また、昭和60年4月から2年間、医学部附属病院長を務められておられます。現在は、医療法人平成会女の都病院院長に就任され、地域医療の発展のためにご活躍されておられます。

それでは、追想のお言葉を難波雄哉様より頂戴いたします。よろしくお願いいたします。

広島の原爆により長崎での原爆死をまぬかれた回想

1945年8月、当時は4年の修学期間を3年半に短縮していた関係で夏休み返上であったが、私は一週間の休みを貰い、郷里である岡山県に帰省した。8月8日までには長崎に帰る予定であり、7日に夜行の下りに乗車する目的で岡山駅にゆくと、「昨日の広島の空襲は新型爆弾で、まだ鉄道の安全が確認されていない」ということで足止めをくい、日付けの変った8日早朝に汽車に乗った。昼頃になって列車が広島に入ると街が見渡す限りの灰色の大地であちこちにコンクリートの建造物の残骸がある未だ見た事のない風景が展開してきたのと、太田川の鉄橋の橋脚に人間の死体が何体も引っ掛り半数は太鼓腹を露出した半裸体という光景に息を呑み、列車がゆっくりと進むのがいらだたしく感じた。この光景はその後の写真で見る事も話で聞くこともないのは何故だろう。残酷な光景のため公開禁止になっているのではとも思っている。列車は8日の夜になって九州に入り、B29による空襲の余燼がくすぶる北九州を車窓に火の粉を浴びながら通過した。

9日の朝、博多で乗った長崎行きの列車が長与駅を過ぎ暫くして突然に停車し、2、30分したところ長崎に新型爆弾が投下され市内に入ることが出来ないとのアナウンスがあり、私には新型爆弾による広島の光景が浮かんだ。徒歩で長崎市内に向うことになった。言われてみると停車の前に長崎側の車窓がピカッと光り風圧でガタガタとしたのが爆弾だったのだと思った。道の尾から六地蔵の辺りまで来ると市内から逃げてくる若い一見して動員されて工場で奉仕活動をしていた学生と分かる一団に会ったが、彼等の多くで顔の皮膚が剥けて顎から垂れ下がっていた。赤迫辺りを過ぎると女性や子供から老人などなどの逃げる人々に遭遇するようになり、とても市内に入れる状況ではなく、たまたま一行の中に西山、片淵方面に行くという一団があったので中川町に下宿していた私はこの人達についてゆくことにした。何処をどのように通ったかは今もってはっきりとしないが、恐らく本原、三原町を経て西山へと山越えしたのではないかと思うが、この方向は街から逃げる人達と同方向であった。途中に水をはった稲田があり、熱い熱いとセーラー服の女学生が水田の中を泥んこになって這い回っていた光景が脳裏に焼き付いている。当時の旅行者は誰でも持っていた水筒も、空になっていたが水を求める被災者に抱きつかれて歩けないことから棄ててしまった。西山方面に越すと空襲による火災はなく、蛍茶屋の下宿には夕方にたどり着いた。一見したところ何も被害がないようでも下宿の屋根は瓦が飛び一部に穴があいていた。その夜は再び空襲があるという噂が流れ、近所の人達とともに本河内水源地の奥山に逃避して一夜を過ごした。

8月10日は先ず大学を目指したが長崎駅辺りを境に浦上一帯は壊滅しており、かなり遠くから大学病院の煙突が折れているのが望見できた。焼け

跡には肉親、知人を探し求めてきているらしい人々や、死体収容に働いているらしき人々が行き交っていたが私は不眠と下痢で早々に下宿に帰り少し休んだが、落ち着いていられず午後になってから大浦にあった大浦寮（大学の管理ではなかったが医大生が多く下宿しており仲間内で大浦寮と呼んでいた）に親友の安否を尋ねたが彼は9日の朝に大学に行ったまま帰ってこないということだった。しかし、上級生で大学病院内にいた学生には被爆後に帰っている学生もいて、彼等から病院や医学部の被爆状況を詳しく聞くことが出来た。彼等は大学に行っても仕方がない一両日中に帰省すると言って、私にも帰省を勧めた。

8月11日は体調不良をおして、大学病院に近い現在の平和町地域に下宿していた級友を訪ねたが下宿のあった位置さえ判別できなかった。丘の上から見渡す焼け野原のあちこちに死体を焼く煙が望見されたが、悪路を走るトラックの荷台で収容した死体が丸太のようにポンポンと跳ねていた光景が今もって目に焼きついている。私の体調は悪化し血便をみるようになり11日の午後からは寝込んだが15日の天皇の終戦放送はラジオを囲んで数人と聴いた記憶があるので体調も行動が可能な程度になっていたようである。よく16日には再び帰省した。

考えてみるとポツダム宣言は7月26日で、これを拒絶した日本は10日後の8月6日に広島、9日に長崎と原爆を受け、更には9日未明にはソ連の満州侵攻が始まっている。要するに第2次大戦における三大被害はポツダム宣言を受けてから受諾するまでの20日間のうち後半の10日に集中している。にも拘らず何故かこの間に何がどのように討議されたかは全く明らかにされていない。

1954、5年だったかと思うが被爆時の場所を報告したことがあり、私は長与、道の尾間の汽車の中と記したが、これによって被爆者健康手帳を交付されている。当時、保険の係りと「アメリカが金を出すのなら受けるが、でなければ受け取らない」と係りと押し問答をし、係りが「原爆から金が出ればそれだけ保険組合は助かるので是非」と言われてもつことになった。

現在、核兵器反対運動が盛んに行われており、大変結構なことであるが、明るい見通しは見えていない。

山口仙二さんは被爆者代表として国連でも訴えたこともあり私の知人でもある。私は彼に原爆反対、核兵器反対を繰り返すマンネリな運動では駄目だ、「非人道」な核兵器反対と是非、非人道という言葉を入れるべきと伝えたことがあるが、現在、彼は第一線を引いていることもあってか反核運動に特別の変化はないようである。

核兵器が非人道であるか否かについては国際司法裁判所で論じられ各国代表の投票があったことがあり、日本代表が「国際法に反する非人道兵器とまでは言えない」という煮え切らない一票を投じたということがあったが、一瞬にして全てを破壊し、何万の非戦闘員を殺し、その後何年にもわたって死に至る病の恐怖を与える核兵器が非人道でないわけがない。原爆が非人道であることは私がこの眼でみた確信である。

実は1995年の「同窓会だより」の原爆50周年特集号に寄稿した私の「原爆の回想と誓い」の中で、アメリカに原爆の非人道性を認めさせることは原爆に対する謝罪につながり、アメリカが原爆投下を謝罪することは核兵器廃絶に繋がることを強調している。核兵器が国際法に違反した兵器となった時、はじめて核廃絶への道が開けると確信している。これこそが、原爆死した霊にたいする生き残った者が果たすべき責務である。

原爆は戦争を終わらせ100万人の人命を救ったとアメリカは主張しているが、非人道兵器は如何なる理由によっても正当化されるものではなく、時効もない。

9月にはアメリカの下院のロベス議長がG8下院議長会議で広島を訪れるが何かが有ることを期待する。

平成21年度8月9日講話

井手（いで）　一郎（いちろう）（昭和28年卒）

井手一郎様のご紹介

井手様のプロフィールをご紹介させていただきます。

井手様は、昭和19年に長崎医科大学付属医学専門部に入学され、在学中に原爆に被災されておられます。その後、昭和24年に長崎医科大学に入学され、昭和28年に同校を卒業されました。卒業後は、本学第一内科に入局された後、山口県立病院、佐世保市立市民病院での勤務を経て、昭和36年、佐世保市に井手内科医院を開業され、今日も第一線でご活躍されております。この間、永きにわたり、地域医療の発展のためにご尽力されております。

それでは、追想のお言葉を井手一郎様より頂戴いたします。よろしくお願いいたします。

8月9日の原爆被爆の想出

一　原爆直前の学生生活

下宿は西山の細菌学教授の青木先生の御宅のすぐ上の左側の下の方であった。同宿者は学部四年の古賀典志さん御夫妻、同四年の肥後　実さん、私の部屋に医専一年の奥野君、それに三菱勤務の渡辺さん御夫妻の計7名であった。大学は日曜祭日の休日がない365日登学することであった。

戦争末期の昭和19年4月入学の私達は理科系学徒の勉強は許されていたが土曜日曜祭日は0の毎日の講義のために、食糧補給や夏休みの名目を勝手に作って試験終了後勝手休暇をとる様になった。毎月八日は大詔奉戴日で、朝朝礼らしきものがあり原爆投下の日は角尾学長先生（先生は少特相当官で学長閣下であった）はその日東京出張より帰られて、「今朝東京より帰って来たばかりで学長室でワイシャツだけを着替えて来たので御許し戴きたい」と前置されて八日の大詔奉戴日の大詔を奉読されその時広島を通ったが広島の爆弾はどうも空中で炸裂するらしく被害は広範囲に亘るから大学は疎開を急がなければいけないと話された。

私はお盆に帰省するため長崎駅へ切符を買いに九時頃大学を離れた。長崎駅でずい分行列をして時間がたち新大工町にあると聞いた眼鏡屋に立寄った。眼鏡屋も配給通帳の印鑑をおしてもらう人で行列であったので「ほととぎす泣く迄待とう」を決め込んで腰をすえて待つ事にした。此の時「西部軍官区情報!!西部軍官区情報!!…只今敵一目標、島原半島を西進中…」と云う情報が流れた途端、爆音が聞えたがまさかこれが情報の飛行機であるまいと思った途端、神社の方向に巨大なマグネシウムをたいた様な紫色の閃光を見たのである。

二　爆弾落下後の私の行動

原爆落下直前迄行動を共にした相原君の事気にかかり近くの彼の下宿をたずね報国隊の腕章（常に携帯していた）をつけて救護所に指定されていた伊良林小学校へ向ったが勿論まだ早すぎて誰もいなかったので西山の下宿へ向ったが下宿は狼藉の限りをつくした有様であった。後の山に逃げていた下宿の小母さんが帰って来たので浦上へ山越して行くにはどれ位の時間がかかるかと聞くと3時間位かかるでしょうと云う。（この判断が私の行動をあやまらせた）それでは帰りは夜中になるから翌日大学へ行こうと考えた。

三　九日の大学

朝から駅から大学までの道は平坦であった学生が3、4人歩いている。私は大学はどうなっているでしょかと尋ねると「私達は九大の学生です」と云って取り付くしまもない。やっと病院玄関につくと調先生、筬島先生、木戸先生等が居られその付近に頭髪がそっくり剥げてしまった人が居た（あとで青い服だったので浦上刑務所の囚人であった。穴弘坊にたくさん大学の人が居ると聞いて穴弘坊へ登ると大学関係者がたくさん居たが顔か全部すすを塗った様に真黒で誰が誰だか判らな

い。名乗った学生はわかるだけであった。（下宿へ連絡してくれという希望も聞くだけで何も手につかない）

私は目的を同宿の古賀さん、肥後さん、奥野君に絞ることにした。

古賀さんは翌日十日西山の山を下りてくるのを奥さんが目ざとくみつけて走って行って連れて帰った。肥後さんは放送局下の防空壕で兄さんが発見、奥野君は御母堂がグラウンド附近で発見されたと聞く。

以上

平成21・7・18記

平成22年度8月9日講話

築城（ついき）　士郎（しろう）（昭和22年卒）

築城士郎様のご紹介

築城士郎様のプロフィールをご紹介させていただきます。

築城様は、昭和17年に長崎医科大学に入学され、在学中に原爆に被災されておられます。昭和22年、長崎医科大学を卒業され、インターン終了後、昭和23年に本学精神神経科に入局され、講師、助教授を務められました。昭和38年、長崎市内に精神科クリニックを開業され、今日も第一線でご活躍されております。この間、永きにわたり、地域医療の発展のためにご尽力されております。それでは、追想のお言葉を築城士郎様より頂戴いたします。よろしくお願いいたします。

追想　原爆の日

65年むかしの原爆のとき、私は長崎医科大学の3年生であった。当時私の家は長与村（現在長与町）に疎開しており、汽車通学していた。

8月9日、いつものように長与駅で、長崎行きの列車を待っているとき、長与出身の同級生尾崎俊行君とぱったり会った。どちらからともなく「今日はサボろう」と云い出し、尾崎君を連れて自宅に引き返した。尾崎君が私宅を訪れたのはあとにも先にもこのときだけ。

ふたりで寛いでいた時、いきなり閃光爆風で家財道具が吹き飛ばされ、近くに爆弾が落とされたと思い、土間に突っ伏した。そっとのぞいた外に見えたのは、長崎方面に立ちのぼっている巨大な雲の柱。やがて長崎から山越えしてのがれてくる被爆者の群れが続き、たちまち農家という農家はすべて被爆者の収容所となった。

医師がいない田舎で手当をと言われても、ピンセットでガラス片を抜き取るか、傷口に赤チン、チンク油を塗るくらいが精一杯。昨日まで元気だった人が1日で急変して吐血したりして次々に死んでいった。原爆症とは思いもつかず、敗血症を疑ったりしていた。

数日して、山越えして川平より長崎に入った。尾崎君は浦上の大学に救護に通っているという話で、壊滅した大学のことが気になっていた。空襲も心配で、鉄帽を背にしての入市であった。

浦上は一面の焼け野原で、対岸の稲佐山が間近に見えた。ところどころに炊き出しの握り飯を入れたままの大笊が放置してあり、饐えた臭を放っていた。人影はまばらであった。

天主堂側から大学のグランドに這い上がった。上ったところにいきなり学生らしい爆死体、木陰で昼寝でもしていたのであろうか、足を組んだまま天を仰いだ黒こげ屍体。両眼がとび出て「一体何事か」と言いたげな格好に胸をつかれた。基礎医学のほうに上っていき、倒れた大木をまたぐと足元に焼死体が…。焼け爛れた顔に露出した金歯が無残であった。病院のほうに下りていくに従い、救援の人らしい姿を見かけるようになったが、学友や知人とは会わなかった。病院の坂の中途に爆死した馬が四肢を天に向けて横たわっていた。友人たちの救護もできず心残りのまま帰途についた。

以下、後日談。大学病院は市内の小学校を借りて臨床講義を続け私はそこで卒業した。その新興善小学校は私が卒業した小学校であった。インターンを終え、医師の免許を取り正式に精神科に副手として入局した。命の恩人、尾崎君は生理学教室に入った。助教授になるのも一緒で、興善町のみすぼらしい学長室で並んで古屋野学長から辞令をもらった。

その後、尾崎君は弘前大学医学部の生理学教授となって北へ去った。私は駅前に長崎で最初の精神科外来クリニックを開業した。

彼は定年前に原爆手帳が欲しいといってきた。私は証人となった。風の便りに手帳を取得したようだったが、彼はまもなく教授室で急死した。湯

沸かし器の事故とか言われたが詳細は不明であった。

私は今年9月15日で満88歳。現在まだ精神科外来の診療を行っている。外来の治療は、薬物療法と精神療法で、それらだけでは生活のしづらさを抱えた患者のサポートは十分ではなく、社会復帰も困難な場合が多い。

そこで樺島町の築城クリニックのそばに、集団療法としての俳句療法を含めたさまざまなプログラムを行い、患者の社会復帰の手助けをするデイケア施設を計画中である。

原爆の日にサボって助かった者の、原爆死した学友へのせめてもの責務と思い余命をそのことに捧げようと念願している。

平成23年度8月9日講話

土山（つちやま）　秀夫（ひでお）（昭和27年卒）

土山秀夫様のご紹介

土山秀夫様のプロフィールをご紹介させていただきます。

土山様は、昭和18年に長崎医科大学附属医学専門部に入学され、在学中に原爆に被災されておられます。昭和27年、長崎医科大学を卒業され、インターン終了後、本学病理学第一教室に入局され、昭和44年に長崎大学教授就任後、昭和57年から昭和61年まで長崎大学医学部長、昭和63年から平成4年まで長崎大学学長を務められました。長崎大学退官後は、世界平和アピール七人委員会委員、核兵器廃絶ナガサキ市民会議共同代表などを務められ、今なお核兵器廃絶運動に精力的に取り組んでおられます。それでは、追想のお言葉を土山秀夫様より頂戴いたします。よろしくお願いいたします。

追憶の辞
～原爆慰霊祭追想～

昭和20年8月9日、米軍機から投下された原子爆弾によって、長崎医科大学は壊滅的打撃を蒙りました。その中に在って生き残られた方々、また不幸にして犠牲となられた方々のご遺族も、本日の慰霊祭に多数ご参列のことと思います。

あれから66年の歳月を経ましたが、皆様方には今なお生々しく当時のご記憶が蘇っておられるものと拝察いたします。往事を記憶しつつ、しばらくの間、私の体験を中心としてお話をさせていただきます。

昭和20年に入りますと戦局は日毎に悪化し、誰の目にも日本の敗色は決定的に映っていました。私たちも繰り上げ卒業によって、その年の10月には軍医学校を経て前線に送られることになっていました。そのため8月は卒業試験の最中でした。8月7日夜、私は一通の電報を受けとりました。「ハハキトク　スグオイデヲコウ」というものでした。病弱だった母は、佐賀県神埼郡仁比山村の遠縁の家に疎開させていました。軍人、軍属優先のために列車の切符は入手しにくく、ようやく手に入ったのは、運命の日8月9日の、午前7時少し前のものでした。

午後になって母の許に着いてみますと、母の病状は奇蹟的に持ち直しており、ラジオが長崎に新型爆弾が投下された旨報じていました。当時私は長兄一家と同居していましたが、母は一家のことをひどく案じ、自分はもういいから早く無事かどうかの確認をしてくれ、としきりに懇願しました。私はとうとう母の願いを容れ、その日の夕方、神埼駅を発ってとんぼ返りすることになりました。

ところが帰りの列車はストップに次ぐストップで、道ノ尾駅にたどり着けたのは何と翌朝の午前5時過ぎでした。一歩、駅から下り立った私は、思わず目を疑いました。長崎の北部一帯は緑色を失い、セピア色の廃虚のあちこちには火災の余じんがくすぶり続けていました。街の方から歩いてくる何組もの被災者集団と出会いましたが、皆一様に裸に近く、血まみれの人、皮膚の垂れ下がった人、杖にすがった人たちが、まるで夢遊病者のような足取りで擦れ違って行きます。黙々とした人々の視線は例外なく虚ろで、私のはるか彼方をみつめているようでした。途中で警防団員の一人から、大学病院は残っている、そこには負傷者が多数収容されているので、至急救援に行ってほしい、と告げられました。

瓦礫の山や横たわる死体に足を取られながら病院に近付きますと、迷彩の剥げ落ちた外廊は確かに残っていました。ただ渡り廊下は全て消え失せ、焼却炉の巨大な2本の煙突のうち1本の上半分は爆風によって「く」の字に折れ曲がり、今にも倒れそうなのが印象的でした。病院の内部は火災のため天井や床が燃え落ち、崩れたコンクリートの地肌がむき出しになっていました。大学で機能していたのは、11の救護部隊のうち3つでした。外科

の調教授を長とするもの、同じく外科の古屋野教授を長とするもの、それに放射線科の永井助教授を長とするものでした。私は調教授から手が足りないからと声を掛けられ、さっそく負傷者が収容されている高南病棟へと赴きました。

病棟の地下室から子どもの声もまじったうめき声とともに、多数の負傷者がコンクリートの床の上に横たわっていました。その中に同級生の2人もいましたが、幸い比較的元気そうだったのでホッとしました。しかし外部からの救援隊がやってくるまでの間、すでに医薬品は底をつき、私たちは死に行く人々の脈を取って励ましたり、どうせ助からないと判断される人には、乞われるままにバケツの水を飲ませて上げるほか術はありませんでした。

病院の背後から穴弘法に抜ける途中のイモ畠やカボチャ畠のあちこちには、本学関係者の死体と共に、何人もの負傷者が力なく横たわっていました。穴弘法の上り口付近も同様で、この日、角尾学長も医科大学の防空壕から搬送されたと聞きました。その日の午後だったと思いますが、病院の敷地内でバッタリ永井　隆先生とお会いしました。頭部に鉢巻き状の包帯を巻き、耳元から血がにじんでいました。「おう、土山くん無事だったか」と声を掛けられました。なぜ私の名前を覚えておられたのかといえば、次のような理由があったからです。戦争末期になると臨床各科の若い医師たちは次々と招集され、年輩の医師と看護婦たちが残されていました。これでは空襲時の消火や救護活動に支障を来たしかねない、というので臨床教授を長とする11の救護隊が結成され、学生もその下に配属されることになりました。そして私の配属先が偶然、放射線科だったわけです。

ところで被災者の方々は火傷を負っている者はもちろん、そうでなくても夏の炎天下とあって一様に「水を、水を」と訴えました。ただ病院一体は広く断水していたため、遠くからバケツに汲んで運ばなくてはなりません。瓦礫に足を取られながらの水汲み作業は、決して容易なものではありませんでした。ところが幸いなことに、現在の熱帯医学研究所の一角、当時そこには薬学専門部が存在し、その大きい貯水槽には水が残っているとの情報が入りました。それだと距離的にも大分近いので大助かりでした。

3日目の夕方だったと記憶していますが、水汲みの途次、私は思い立って初めて基礎医学教室跡の敷地に足を踏み入れました。被爆前には8つの木造教室が、それぞれ緑の木立に囲まれて点在し、その間に小さいコンクリートの建物も少数見られました。しかしその時は様相が一変していました。コンクリートの残骸を除けば、見通せるすべての教室は台座のみを残して壊滅していたのです。講堂が在ったと覚しい場所に歩を進めたとき、死体を見慣れていたはずの私でさえ、思わず息をのみました。何十人とも知れない医学生たちのものだったのでしょう。整然と座席に並んだ形のまま、多くは白骨化した姿をさらしていたのでした。すさまじい爆風で瞬時にして講堂は倒壊し、火災のため逃げ場を失ったのに違いありません。暮色の迫る中で私は長いことその場に立ち尽くしていました。

後日の調査では5つの講堂で医科大学生および付属医学専門部生あわせて400名近くが受講中で、教壇に在った教授と共に犠牲となったことが判明しています。8月12日には調教授隊の大半が、負傷者を連れて滑石の岩屋クラブに移ることとなり、私たち少数の者が病院の廃虚へ残留しました。死者の処理に当たるほか、消息の分かる範囲で被災者の生死を知らせる任務のためでした。地下室から引っ張り出した板に紙を張りつけ、氏名の書き出しを始めますと、家族の安否を気遣って訪れ出した親族の方たちが、喜びの涙や悲しみの涙を浮かべられるのに一喜一憂したものでした。その間、暇をもらって自宅辺りを探し回っていた私は、5日目に長兄とその兄嫁、5歳の女の子と3歳の男の子、一家四人の全滅を確認しました。爆心地から350mの山里町の一角でした。

8月22日には角尾　晋学長が岩屋クラブで死去されたとの報に接しました。角尾先生は東京出張の帰路、8月7日には被爆直後の広島を徒歩で横断されたのち、列車を乗り継いで8月8日早朝に帰崎されました。そして直ちに私たち学生や教職員を

グラウンドに集められ、いかに広島の惨状がひどいものであったかを話されました。その先生ご自身も8月9日に外来での診察中、原爆に被災されたのでした。今日でいう“二重被爆”の形として犠牲になられたことになります。

こうして長崎医科大学は学長以下898名の犠牲者を出しましたが、広島には医学校はありませんでしたので、第二次世界大戦中に壊滅した唯一の医学校として海外に紹介されたこともありました。後に私が学長を退任してから、イデオロギーとは関係なく、市民個人の資格で参加する「核兵器廃絶－地球市民集会ナガサキ」という国際NGO会議を4回開催し、10年間にわたって委員長を務めましたのも、こうした無念の死を遂げられた先輩後輩の御霊を、いささかでも鎮魂できれば、との思いからでございました。

いま66年を経た医学部構内は、蝉しぐれと共に平和そのもののたたずまいに包まれています。私たちはこの平和を永遠に引き継ぐ責務を改めて感じ、非人道きわまる核兵器の廃絶を目指すことをここにお誓い申し上げます。最後にご列席の皆様方のご健勝とご多幸の程をお祈りしつつ、私の追憶の辞とさせていただきます。

平成24年度8月9日講話

郡家（ぐんけ）　徳郎（のりお）

郡家徳郎様のご紹介

郡家徳郎様のプロフィールをご紹介させていただきます。

郡家様は、当時長崎県立長崎中学校の4年生で三菱兵器幸町工場に学徒動員をされており、当日は自宅で原爆に被災されておられます。また、原爆で亡くなられた薬学専門部2年生でした郡家淑郎様のご遺族です。それでは追想のお言葉を郡家徳郎様より頂戴いたします。よろしくお願いいたします。

第67回長崎医科大学原爆犠牲者慰霊祭追憶（被爆体験記）

僭越でありますが、被爆体験を語り長崎医科大学原爆犠牲者方々のご冥福を祈りたいと存じます。

当時、私は旧制長崎中学校の4年生で、三菱兵器の幸町工場に動員されていました。動員は昼夜2交代制で、8月9日のその日は夜勤でしたので、午前中は下西山の自宅で待機していました。母は2年前に他界し、父は仕事で大村を拠点に各地に出かけていましたので、兄との2人暮らしでした。我が家はもともと諏訪神社下の炉粕町、現在、日本銀行の建物がある丁度その前にありましたが、終戦の年の7月半ば、軍命令による家屋疎開で取り壊されましたので、下西山の父の友人宅に部屋を借りて兄と2人移り住んでいたのです。爆心地から凡そ2.5kmの処でした。

その日は朝から空襲警報が出ていましたが、9時頃に解除になりましたので、薬学部2年生だった兄淑郎は鞄を抱えて大急ぎで大学へ向かいました。しかし、直ぐ戻ってきて“万年筆を忘れた、机の上にあるから取ってきて”と玄関先で私に声をかけ、“では行ってくるね”と笑いながら片手を振り振り出かけましたが、その後ろ姿が兄との永遠の別れになるとは思いもよらぬことでした。忘れもので戻ってきたのは、虫の知らせだったのかも知れません。

私は2階の部屋に戻り窓際で本を読んでいました。突然、B29の急降下するような異様な音がしたので、“空襲警報は解除になっているのに妙だな”と思いながら、窓から身を乗り出して空を見上げましたが、何も見えませんでしたので窓を離れたその瞬間、数百のフラッシュを一度に浴びたような目も眩む閃光に包まれ、背中一面に熱火に焼けたアイロンを押しつけられたような強烈な熱線を受けました。と同時に、“ゴォー”という大きな地鳴りと共に強烈な爆風で床に叩きつけられました。てっきり、B29の直撃と思いましたが、そのような様子もありません。気が付くと、部屋はもう滅茶苦茶で、床の畳はみんな浮き上がって家具や襖もろとも隣の部屋まで吹き飛ばされており、私は倒れた本棚の下敷きになって、腕や頸部にガラスの破片が刺さり血が流れていました。

その時、浦上の上空で何が起こったか知る由もありません。“兄が戻ったら此の部屋の惨状をみて驚くだろうな”と、とんでもない勘違いをしていました。何も知らなかったとはいえ、浦上が阿鼻叫喚の火の海に包まれているその時に、ぼんやりと身の回りの事しか頭に無かった自分自身が、洵に情けなく、申し訳なく、自責の念に駆られます。間もなく、近くの金比羅山の背後から不気味な雲がもくもくと湧き上がり、真夏の太陽は赤黒くなって輝きを失い、空からべとつく黒い雨や得体の知れぬ物が、次々と降り注いできました。

長崎駅から先は猛火で通行禁止と判って、その日は自宅に留まりました。夜は停電で真っ暗でしたが、長崎の空は血を流したように赤く染まり、ボォーン、ボォーン、バーンというガスタンクの破裂するような音が何時までも絶え間なく鳴り響いていて不気味でした。夜が更けても兄は帰らず不安になりましたが、街の中の火事で動けず、何処かに足止めされているとばかり思っていました。

翌朝になっても戻らないので愈々不安となり、大学の方に行ってみようと思いましたが、長崎駅方面は以前として大混乱の様子なので、家の近くの県立高女の裏から金比羅山を越えて行くことにしました。山道に這入り暫くすると、全身血だらけ、ぼろぼろの姿で、よろめきながら坂を下ってくる幽霊のような人々の群に出会い、“何が起こったのか”とぞっと怖くなりましたが、その恐るべき光景は山を登るにつれて益々ひどくなりました。皮膚を剥かれ大火傷で全身真っ赤な人々、頭を割られ顔を裂かれて血まみれとなった凄まじい形相の人々が、あちらこちらに半死半生の状態で呻きながら蹲っていました。“水を下さい”“水を”と求められましたが、水筒はおろか、何一つ持たずに家を飛び出した私には何をすることも出来ませんでした。

そして、山の上に辿り着いたとき、其処からの眺めは、「わが目を疑う」と言う言葉がありますが、正にその通りで信じ難いものでした。其処にあるべきはずの建物、街並みは跡形も無く、見渡す限り何処までも荒涼とした焼け野原が広がっていました。三菱の軍事工場は飴細工のように曲りくねった鉄の塊りとなり、大学の付属病院は黒く煤けた無残な姿で、煙突が一本、途中で折れ曲がり寂しく立っていました。夢中で山を駆け下りましたが、見るも無惨な姿と化した屍体や瀕死の重傷者が至る処、足の踏み場も無く、ごろごろと転がっていました。その戦慄の光景は、生涯、私の目に焼きついていて離れませんが、言葉にするには余りにも辛いことであります。その様な身の毛もよだつ地獄図の中にあって、私は何時の間にか、何を見ても余り怖いとも恐ろしいとも思わなくなっていました。人間としての感情を失い、放心状態にあったのだと思います。

肉親を探しているのでしょうか、帰る家を無くしたのでしょうか、疲れきった無表情の人々が、三々五々、黙々と爆心地の方に向かって歩いており、私もその後に続きました。半ば白骨化した遺体、両手を高く挙げ天空に向かって何か叫ぶような姿で黒焦げとなった人、赤ん坊を胸にしっかり抱き抱えたまま真っ黒になった女の人など、無惨な姿が至る処に散乱していましたが、それらは、まるで作り物の塑像ののようで、原爆炸裂の瞬間、高線量の放射線を全身に浴びつつ、あっと云う間に猛火に包まれ、命を奪われたことを物語っていました。浦上川には猛火を逃れ、水を求めて飛び込み、そのまま息絶えた人々が累々と山をなして折り重っており、爆圧で腹部が裂けて腸や内臓が川に流れ出たり、両目の眼球が10cm近くも飛び出した姿もありました。この世にあるべき光景ではありませんでした。

医科大の付属病院は外郭だけを残して内部は真っ黒に焼けて空洞化しており、どこもかしこも遺体が転がり、死の世界が広がっていました。そして、大学の基礎教室の跡と思しき処には、夥しい数の白骨や頭蓋骨が散乱していました。基礎教室は爆心地から5-600mの処で大学でも最も爆心地に近く、しかも木造建築でしたので、数千度と云う太陽の表面温度にも匹敵する想像を絶する原爆の熱線とその恐るべき衝撃波で、一瞬にして炎上崩壊したものと思われます。呆然自失、私はそれから何処を彷徨い、どの様にして家に戻ったのか全く記憶にありません。

佐賀・唐津方面の旅先で原爆のニュースを聞いた父は、急ぎ長崎に向かいましたが、汽車のダイヤは混乱し運行も途絶え勝ちで、私と再会できたのは原爆の3日後でした。壊滅した大学の跡やグビロが丘など一緒に歩きましたが、余りの惨状に父は言葉もなく、焼跡に佇んで瞑目し般若心経を静かに唱えていました。吾が子を失い悄然としたその姿を思い出すと哀れでなりません。行方不明となった兄の死はなかなか受け入れ難く、何時の日にか、ひょっこり戻ってくるのではないかと、私は長い間、心の中で待ち続けていましたが、遂に、その日が訪れることはありませんでした。

原爆の翌朝、山越えした金比羅山には色々と複雑な思いがあり、もう一度登ってみたいと思っていましたが、今年の五月に願いが叶いました。あの時歩いた山道の周辺は新興住宅地となって様子は一変していましたが、頂上に向かって更に奥に進みますと、其処は鬱蒼と樹木の繁った薄暗い静寂の世界で、人影一つなく、67年前に、此処まで

遁れながら命を落とされた方々の霊魂が漂っているかのように思われました。それにしても、あの時、此の辺りは樹木一本とてなく、禿山だったはずだと思いましたが、それは、あの時、原爆の熱線で金比羅山の樹木も、すべてが焼かれ、燃え切っていたに違いないと判りました。“水を”、“水を”と求める方々に何も出来なかったことを思い浮かべながら、持参したペットボトルの水を多くの血を吸ったそこらの山道に撒きました。あれから世の中は一見豊に平和になりましたが、それは多くの犠牲の上にあるものであり、私達の受けた原爆の傷跡は、余にも深く、悲しみは永遠に癒されることはない、と云う想いを一層強くしました。

昨年の此の日、近くの原爆資料館で、原爆投下2日前に米軍機が撮影したという長崎全市街の航空写真が展示されていました。畳8畳くらいに大きく引き伸ばされたその航空写真には、家の一軒一軒、小さな路地まで、はっきりと写し出されていました。その写真に写る長崎では、原爆が目前に迫っていることなど誰一人として知る由もなく、原爆に斃れた方々も、家族や友人達と苦楽を共にしながら何時もと変らぬ時を過ごしていたのだと思うと、痛恨の極みであり悲涙を禁じえませんでした。家族や友人を奪い、人生を狂わせる戦争、とりわけ、原爆・核兵器というものが、どんなにか残酷であり、非人道的であるか、怒りを悲しみを新たにした次第であります。

戦争なかりせば、原爆なかりせば、此処に眠られる長崎医科大犠牲者の方々もまた、医学・薬学、学問の世界で活躍され、医療等の分野で社会に貢献され、また新たな家族を築かれた方々も多いに違いなく、無念でなりません。核なき世界、戦争なき平和な世界を祈るばかりです。67年前の此の日、長崎に何が起ったか、その記憶を私共は心に深く刻んで後世に伝えることが責務であると思います。

原爆に斃れられた方々のお一人お一人に思いを馳せ、追悼の祈りを捧げつつ、私の被爆体験を終わりたいと思います。

以上

平成25年度8月9日講話

井石（いせき）　哲哉（てつや）（昭和31年卒）

井石哲哉様のご紹介

井石哲哉様のプロフィールをご紹介させていただきます。

井石哲哉様は、長崎大学医学部を卒業後、長崎大学医学部第一内科に入局し、長崎原爆病院内科、放射線医学総合研究所勤務を経て、長崎大学医学部附属病院助手、講師となり、昭和44年に井石内科医院を開業しており、さらに、昭和57年4月から昭和63年3月まで社団法人長崎県医師会常任理事、昭和63年4月から平成8年3月まで副会長、平成8年4月から平成20年3月まで会長を務められました。また、本学においては、昭和59年6月の医学部教育後援会設立に尽力され、さらに平成8年6月から平成24年6月まで長崎医学同窓会会長、その後、長崎医学同窓会顧問に就任され、母校の発展のために多大な貢献をされています。

それでは追憶のお言葉を井石哲哉様より頂戴いたします。

追憶
～私の被爆体験～

当時私は旧制中学2年生、13歳。毎日報国隊として、長崎駅構内の日通で魚雷や震洋当時通称㊃艇と呼んだ船体を貨車に積み込む作業をしていた。自宅は被爆1年前、旧駒場町から長与に疎開していた。被ばく当日の朝、長与駅についたときは警戒警報中で、上下二本の列車が止まっており、いつ発車するかわからず車外で待機していた。11時02分ピカの閃光としゅるしゅるという爆弾落下様の音がしたので、駅をめがけて爆撃されたと思い、駆け出した。暫くしてドンと爆風がおそい近くの窪地に倒れこんだ。起き上がって駅を見たが煙もたっていないのに、下りてきた人たちの中には顔から出血している人もいた。割れた窓ガラスで切ったらしい。浦上方面の空に例のオレンジ色の雲がキラキラと天高く舞い上がっていた。友人と大橋の兵器製作所のガスタンクがやられたかもしれんと話ながら、行ってみようと女都峠まで登ってみると、消防団の人から長崎は火の海で行くことはならぬといわれた。そのうち数名の煤で黒くなった顔をした人達がよろめきながら登ってきた。相当の被害があったことが想像できたので、酒屋町の会社に行った父親のことが気になったが、帰宅して待つことにした。

夕方おそく杖を突きながら煤けた顔で父は帰ってきた。金毘羅山から尾根伝いに帰宅したようで大体の浦上方面の状況が分かった。疎開先の長男（師範学校生徒）が帰宅せず、又私の母校の城山小学校や旧制瓊浦中学校（現西高）の多くの恩師や友人、親戚などのことが気がかりで明日確かめに行こうということになった。

翌10日友人3人と道ノ尾駅まで歩いて行ったが、駅前広場には重傷者が地べたに並べてあった。頭蓋が割れたもの、手足が切断されたものなどいずれも死亡直前の様相であり、諫早や大村の軍病院などへの搬送を諦められた人たちであったろう。3人とも恐怖感に襲われたが、気を持ち直して線路伝いに歩いた。六地蔵付近で同級生の一人と会った。怪我もなく外海の実家に帰るとのことであり、浦上方面の状況を聞いて別れた。暫く歩くと一人の中年女性が倒れていた。外見上怪我もなく火傷もなかったが死亡されていた。赤迫付近で線路を降りた。トンネル工場から住吉付近では、全身火傷で腫れ上がり皮膚の一部垂れ下がったような老婦人を負ぶってどこにも生きようもない警防団の人などがたむろしていた。なんとか現文教町の師範学校にたどり着き、二三人の生徒さんに疎開先の長男さんの安否を尋ねたが「確かトラックに乗って出かけるのを見たが、行先はわからない」とのことであった。そこで現昭和町の兵器製作所大橋工場（現長崎大学）の横を大橋に向かった。住吉からこの付近は工場だけの町で民家など殆どなく、民間人には会うこともなかったが、モ

ンペ姿の婦人のこれも無傷の死体を見た。大橋を渡ってから松山にかけて様相は一変した。かなりの民家や店舗が並んでいたので焼けて倒壊した家屋の屋根瓦の残骸を踏み越えながらの歩きとなったが、瓦の積み重なったところを踏んだ途端ぐずっとした感触があり、下を見たら瓦の下に炭化した死体の一部が見えたではないか、全身がこうりつき、済まなさと恐怖でいっぱいで身動きが出来なくなった。親戚の家が付近にあったのだが、判別の仕様もない。上を見るとこの付近の電柱は倒壊を免れたものが多く、上部には炎を認めるものもあった。やっと手を合わせて拝んでから歩き出した。下川付近まで来ると上からつぶされたような電車があり、乗客であったろう人達が川の中に折り重なって倒れこんだ様子は、まさにこの世の地獄絵を見る心地であった。呆然としていたら、憲兵将校が来て「どうしたのか」といわれたので、「城山小学校から旧制瓊浦中学校に行ってみたい」というと、「馬鹿者、誰も生き残った者もいないし、危険であるからこの付近から早々に立ち去れ、これは命令だ」といわれた。仕方なくふと坂本町のほうを見たら、医科大学病院の一部が見えたが、窓からはまだ黒煙が噴き出し、時折紅蓮の炎が見えることもあった。再び憲兵から叱られたので帰ることにしたが、せめてもと旧駒場町の住居付近に行ってみた。何処であったかはっきりしなかった。ひとり顔見知りの婦人にあったが、全然うつろな顔で座り込んでいたので、声をかけることも出来ず大橋から昭和町を経て、浦上水源地、から女都峠を越えて長与まで帰った。今にして思えばこの憲兵さんのお蔭で早く帰れ被爆線量も少なくて済んだのではと思っている。

2日程してから中学の数人の恩師たちが相次いで訪問され、翌日それぞれの実家に帰省されたが1週間したあたりから死亡されたとの電報を受け取ったことを思い出す。その後、追々と友人や親戚の消息も分かってきたが、大分は不幸の転機をとっていた。疎開先の長男さんも今もって遺体もわからない。

それでも友人仲間うちではきっと敵を討とうと勇ましいことを言っていたが、ソ連の参戦の後、15日終戦詔勅が下されたときは何かほっとした気分であった。

原子爆弾については、広島での原爆投下以前に理化学研究所の仁科芳雄博士が新聞に書かれていたのでその存在を知っていた。

私が医師となり原爆病院で被爆者医療に携わり、その後放射線医学総合研究所での第五福竜丸乗組員や、長崎に帰ってから原爆被爆者の染色体研究に携わったことなど、何か因縁めいたものを感じている。

今はただ一日も早く核兵器廃絶の来ることを祈る次第である。

平成26年度8月9日講話

つばきやま　まさこ
椿山　政子

椿山政子様のご紹介

椿山政子様のプロフィールをご紹介させていただきます。椿山様は、当時永井隆博士が部長を勤めておられた長崎医科大学附属病院の放射線科で看護婦をされており、当日は勤務中に被爆されておられます。また、被爆後は永井博士が隊長を務める医療隊で救護活動に取り組まれてこられました。

それでは追想のお言葉を椿山政子様より頂戴いたします。

平成26年度
原爆犠牲者慰霊祭における追想講話

ご紹介戴きました椿山でございます。このような大勢の方の前でお話いたしますので不慣れでございますので、原稿を読ませていただきます。近年テレビ、新聞等で報道されている原発事故、今なお世界には核兵器があることなどについて皆さんは、さまざまな思いをおもちのことと思います。私はこのような現実を見聞きするたび被爆者の一人として原発の汚染の恐怖がよみがえってなりません。そこで私の体験をお話しさせていただきます。

戦争も終わろうとしていた昭和20年8月9日長崎に原爆が投下されました。当時私は看護学校の生徒で16歳の時のことです。尊い命を奪った悲惨な出来事が一瞬の間に「ピカッ、ドン」で運命の日永久に記憶される日になりました。あの日の情景を思い出すと怖くて冷気を覚えます。朝から空襲警報も解除となり、それぞれ役割分担され地下室に入院された患者さんの投薬の準備に地下室に入った途端のことです。運命の11時2分「ピカッ、ドン」で突然目を刺すような光と同時にあたり一面が真っ暗闇になりました。私は床にたたきつけられ、折り重なる天井や棚の下敷きになり、押しつぶされ一瞬呆然となり、自分が今何處で何をしていたのか分からなく、不気味な感におおわれました。しかし「ここで死にたくない、どうか命だけは」と必死で押し分けながら這い出しました。息が苦しく胸に手を当て、脈をふれてみると生きているのは確かだが、目が何も見えない、人の気配もない、一体どうなったのか不安がこみ上げ大声で「婦長さん」と呼びました。「椿山さん、しっかりするのよ、急いでこっちにおいで、早く出なければ！」と久松婦長さんの声が聞こえました。ほっとした間もなく窓際に炎が見えたので、夢中で外へ出ました。踏み場もないがれきの上を歩いて行くと橋本看護婦さんが悲惨な声で「大変です、永井先生が生き埋めです！」と叫び、来られました。大急ぎで久松婦長さんと高い塀をよじ登って行ってみると、永井先生は横に這い出し、顔は真っ赤な鮮血で染まりながら、負傷者救出の指示をしておられました。見る見るうちに負傷者の山、身動きもできません。髪の毛は逆立ち針金のようにピンとなり、顔は真っ黒にすすけて誰か見分けもつかなく、人間とは思えない有様。「助けて、寒い、水を」と、呼んでいる人、目の前で命絶える人、2階3階から這い出して来る人、ガラス破片の傷、骨折、捻挫等、見る人見る人助けを求めてくる人ばかり、生死をさまよう人に水をやることも出来ず、人間らしいことをしてやれなかった。その悔しさ、つらさは生涯忘れることができません。永井先生は傷を押さえながら「火が回らないうちに安全な場所へ」と指示をされました。私は一台の担架を見つけ婦長さんと運びました。其のうち又火が回り残された人々の悲鳴を聞きながら、どうすることも出来ず、見る見るうちに一面火の海と広がるばかり。全く身のすくむ思いでした。無我夢中で飲まず食わずの時間がたつのも気づかず、一息した時は身も心もへとへとでした。そこで教室の皆さんも1人2人と見えだし、お互いに抱き合って喜びました。しかし5人の看護婦の姿が見えないので、皆不安そうなため息をつき始めた。

永井先生は右側頭部の動脈が切れ、鮮血で服も白衣もべとべとに染まり、通りがかりの外科の先生に仮の手当てを受けられました。永井先生は少し元気を取り戻され再び指示が始まり、負傷者を病院の裏山へと運びました。途中のたうち回る人、ぶるぶる震える人、無表情無気力で出血多量で変わり果てるもの、放心状態で我が子の名前を呼びながらさまよう者、即死した母親の胸にすがりおっぱいを探す無心な赤ん坊、何とも言えず「頑張って」と言いながら抱きかかえました。永井先生は「これは戦地よりひどい、しかし皆は生きている、元気出して頑張ろう」と言われ、又動き始めました。とにかく腹が減っては戦ができないというので男は大きな石を集め釜土を作り、女は食べるものを集めて畑の中のサツマイモ、カボチャを取り溝の水を汲み取り、鉄兜で煮て食べたあの味が忘れられません。やっと落ち着き永井先生は自分の白衣で血染めの日章旗を作られ、仮の本部を畑の中に作られました。夕日も沈むころ一同寄り添い全員で「海ゆかば～水づく屍～、山ゆかば～草生す屍～♪」と、合唱し「皆ここに帰れ」と呼びかけ、訪ねてくるのを夜遅くまで待ちました。

折からの黒い雨で又防空壕の中へ向かい、負傷者と共に過ごしました。中には赤く焼きただれ、眼球や内臓が飛び出した死体、ずるりとむけた皮膚をぶら下げた幽霊のような行列、人の世の出来事とは到底思えない無惨な光景でした。朝方には疲れたのか眠ったようで、目を覚ますと左右前後と息絶えているむごい姿が今も生々しく脳裏に焼き付いて胸が痛みます。翌日行方不明の看護婦を探しに出かけました。途中米軍が落としたと思われる、ビラをみつけました。見ると「日本国民に告ぐ、見よ原子爆弾の威力を！」と書かれていました。永井先生は「やっぱり原子爆弾であったか…」とつぶやかれ、無言のままでした。不吉な予感がする中又探しに出かけました。「どうか生きていてください」と心の中で祈りながら行ってみると、5人の看護婦は何と運動場のそばで即死の有様で、パンパンに腫れ上がり皮膚は紫色にうっ血し焼けただれ見分けもつけられないほど変わり果てていました。着ていた衣類の焼け残りを目当てにいろいろと試みました。結局確認の後防空壕の中で焼くことになりました。失神しそうになった自分に「戦争ってひどい！」と言いながら、次々とあふれ出る涙をどうすることも出来ませんでした。5人の遺骨は空き缶に入れて名前を書き、その夜は教室でお通夜をしいろいろと語り合いながら悲しい一夜を過ごしました。日がたつにつれ次々と遺族の方が安否を気遣われ迎えに来られました。運命とはいえ自分は生き残り友の遺骨を渡すことは、本当に耐えられない気持ちで胸いっぱいでした。

その後永井先生を隊長とする第11医療隊は三山部落で救護活動をすることになりました。名まえばかりの医薬品を籠に入れて出かけていく途中焼け野が原と変わった中で、あちこちで死体の焼ける臭いが、何とも言えない異様な臭いが、ややもすれば倒れそうな自分にムチ打ちながら目的地へと進みました。上野町の永井先生の自宅へと焼け残った大木を目当てに、熱風を浴びながら道なき道をたどりつきました。案じておられた奥様は、台所のそばで全身真っ黒に焼け、ロザリオの鎖を首につけたまま膝まづき痛ましいお姿を見るに忍びなく言葉も出ませんでした。永井先生は「やっぱり僕の直感通りだった、生きていればきっと訪ねてくると思った」と言いながら黒焦げになった骨を静かにバケツに入れ前日疎開していた2人の子供さんとおばあちゃんのいる三山部落に向かい、永井先生は右手は杖を突き先生の左脇に私の肩を当て負傷された体で一緒に歩きました。爆心地より、離れた小川の水はさすがに澄んでいた。ほこりだらけの体を洗い血で染まった服を洗い炎天下の岩の上に半乾きするまで川の中で待ち、久しぶりにさっぱりとし、白衣を身に着け、ようやく生きている喜びを味わうことができました。着の身着のままで朝は暗いうち夜は星空を仰いで巡回に行きましたが、安全地を求めて集まる負傷者は次第に増すばかりです。しかし材料は思うに任せず救急処置のみで、外傷や火傷には三山鉱泉で洗いました。深い傷などウジ虫が湧きとってもとってもボロボロでてくるのが悲痛きわまるばかりです。元気そうな人が日がたつにつれて、発熱、

下痢、全身の倦怠感を訴え苦しみ死んでいく姿を見守りながら、原爆が何故に残酷なものであるかを知らされこわくなりました。

8月15日の敗戦のことを知らされましたが、それをすぐに聞くことができませんでした。今まで張りつめていた気持ちがどっと力尽き皆泣き崩れました。永井先生は「ついに戦争は終わった、今まで何だったんだ」と男泣きされた光景が今も忘れられません。その後トラックで米軍が上陸してくると報道があり、女や子供は出歩くことはしない様にとデマがはいり、救護活動はひとまず解散ということになりました。

その後は脱毛、耳の聞こえがよくなく病院に通う日が多くなり、ずいぶん悩みましたが、翌年、久松婦長さんより「椿山さんあなたはまだ卒業していないでしょう学校へ戻っておいで！」とお手紙をいただき4月より又大学病院へ行きました。そして学校卒業後3年間勉強の後母の病気で再び天草へ帰り、助産婦、看護婦としてやめる人の苦しみを分かち合い尊い命の誕生の喜びを感じながらお世話をさせてもらいました。84才になった今生きていてよかったことを実感し、家族や周りの人に支えられ幸せであることを感謝している毎日です。

伝えたいことは山ほどですが限りありません、永井先生は当時素晴らしい活躍をされた後白血病と戦いながら、畳2畳敷きの如己堂で命の限りたくさんの本を書かれ、「己の如く人を愛せよ」と教訓を残され、昭和25年5月に他界されました。戦後の日本は平和と繁栄の道をたどっていますが、時の流れと共に人々の記憶もあの悲惨な情景もやがて風化されていくでしょう。当時のことを知る者はすでに年老いて新しい世代に変わりつつあります。生き残りの責任として被爆体験を通し、戦争の怖さ、命の大切さ、平和の尊さを次の世代に語り継ぎこの心情を高めることができればと考えております。ご静聴ありがとうございました。おわります。

平成27年度8月9日講話

朝長（ともなが）　万左男（まさお）（昭和43年卒）

朝長万左男様のご紹介

朝長万左男様のプロフィールをご紹介させていただきます。朝長万左男様は、昭和18年に長崎市に生まれ、爆心地から2.7kmの距離で2歳のときに、被爆されました。昭和43年に長崎大学医学部をご卒業され、40年間原爆後障害医療研究施設原研内科に勤務し、白血病を専門とされてきました。その後、第1回から第3回の核兵器の非人道性会議に関する国際会議、政府代表を歴任されており、現在では、核戦争防止国際医師会議国際副会長、日本赤十字社長崎原爆病院名誉院長、長崎大学名誉教授、長崎医学同窓会長にご就任されています。

それでは原爆復興70周年記念講話を朝長万左男様より頂戴いたします。

原爆七〇年をふり返って

第二次世界大戦の終結の間際の原爆投下から70年が経ちました。

本日、私の講話は、長崎医科大学において犠牲となられた890余名の方々に、この70年間の我が国の歩みと核兵器をめぐる世界の動きについてご報告することにいたします。みなさまの尊い犠牲の中から長崎大学医学部は立派に復興し、日本で最初の西洋医学校としての伝統を今日まで守り、国内有数の地位を占めるに至っております。多くの優れた医師、看護師を輩出して参りました。みなさまと同じキャンパスで被爆しながらも奇跡的に生還された教授、教官の方々の医学部復興の決意と血のにじむ努力が、現在の医学部の隆盛を実現しました。

外科の調来助教授と生き残った学生達との被爆者調査は原爆後早くも3ヶ月後には草稿ができ、人類史上永久に残る原爆の科学的調査研究の第1号となりました。さらに永井隆教授の第11医療隊原爆救護報告書がこれに続きました。昭和25年発刊の永井先生の著書、「長崎の鐘」は戦後の日本で最初の原爆レポートとなり、国民がはじめて核兵器の原爆のなんたるかを理解し、さらに長崎の被爆者としての先生の復興にかける情熱に、戦後のうちひしがれた国民は鼓舞されました。

みなさまと同じキャンパスでかろうじて生き残った医学生達は、次第に急性放射線症に犯され、亡くなって行きました。当時は原子病と呼ばれました。医学生の一人、小倉出身の森尾克磨君は、息絶えようとする直前、嘆き悲しむ両親に「泣きなさんな、僕がこうして今死ぬのも原子病の治療法がよく分かっていないからなのです。研究さえすれば、きっと助かる方法が見つかるはずです。どうか原子病の研究に力を尽くしてください。そして原子病で死ぬものがいないようにしてください。犠牲は僕たちでおしまいにしてください」と両親を慰めた言葉が永井隆先生の著書の中に記録されています。

その後原子病は急性放射線症と呼ばれるようになります。また数年後から被爆者に発生してきた白血病や現在まで続く癌の発生は原爆後障害と呼ばれ、これらの病気に対して、長崎大学医学部は総力を挙げて研究を推進してきました。昭和40年には、原爆後障害医療研究施設が設立され、昨年からは研究所に昇格し、日本で文字通り放射線被曝のトップの研究機関となっています。チェルノブイリ事故やフクシマ事故など国内外の原子力災害において、医療支援と放射線の人体影響調査の中核機関となっています。

いっぽう医学部全員の願いとして、世界で唯一被爆した医科大学に課せられた使命として、核兵器廃絶を求める活動にも邁進してきました。核兵器による無差別殺戮は、一般市民が暮らす人口密集地帯に対して無警告で投下され、しかも広島・長崎ともに午前中の、市民がもっとも活動する時間帯を狙って実施されました。国際戦争法規に照らせば明らかに違法な行為でした。今世界の国々

は核兵器の完全廃絶を目指して、毎年、国際会議を開き、この核兵器の非人道性をあらゆる角度から分析し、実証し、核兵器国に核廃絶を迫りつつあります。その会議には私も毎回政府代表として招かれ、2回ほど講演しましたが、その冒頭では必ず、長崎医科大学の890名の犠牲とその後の死亡統計の図を示し、原爆から70年後の今も、癌と白血病の過剰な発生が持続していることを説明し、放射線被曝の人体影響が生涯にわたり持続していることから、核兵器の非人道性を証言致しました。

世界の政治は、みなさまが亡くなった後、数年も経ずして米国とソビエト連邦のイデオロギー対立が始まり、核兵器の数の勝負による冷戦となって1989年まで40年間続きました。1962年のキューバ危機では核戦争勃発の瀬戸際まで行きました。1970年代には核兵器の数は7万発までふえ、地球を10回も破滅させうるまでに達し、狂気の時代となりました。

1980年東西両陣営の医師達がこの状況を憂えて、核戦争防止国際医師会議（IPPNW）をワシントンで設立しました。長崎と広島からも原爆後障害研究者が創立メンバーとなって参加しました。長崎からは被爆学徒であった市丸道人教授が参加しました。IPPNWの活動はめざましいものがあり、当時のソビエト連邦のゴルバチョフ大統領にとうとう核実験の中止の決断をさせました。その功績で、IPPNWは1985年のノーベル平和賞を受賞しています。これ以来世界は核実験を行えない世界に変わり、その後も幾多の国際会議で核兵器の削減が協議され、現在は1万5千発台まで減ってきております。これでもまだ世界を数回破滅させるのに十分です。

2011年には長崎大学には、原研に加えて、念願の核兵器廃絶研究センター（RECNA）が国立大としてはじめて設立されました。世界の核兵器の推移に目を光らせ、長崎市をはじめ多くのNGO団体そして日本政府に対しても核情報を提供し、核廃絶に向けての政策提言などを行い、科学的シンクタンクとしての役割を発揮しています。これらが、先に紹介した森尾克磨君に対する、現在の長崎大学からの回答であります。

2009年米国大統領に就任したオバマ大統領は、就任後間もなくプラハ市において究極的核廃絶を目指すことを約束する宣言を行いました。それから7年経ち、原爆70年を迎えましたが、核廃絶の実現の見通しは残念ながら立っていません。しかし核兵器の非人道性のコンセンサスは核兵器国の米国とその核に頼る日本をも含む160ヶ国以上の国々によって支持され、いよいよ核兵器を非人道兵器として国際法で定める最終段階の協議が始まろうとしています。一昨日、米国の国務次官ゴットメラーさんが長崎原爆慰霊祭に出席するために来崎しました。米国大使館の依頼で彼女に原爆被爆者のこれまでの原爆後障害のレクチャーを依頼されましたが、その生涯にわたる持続性と原爆使用の非人道性について強調しました。被爆者を含め、今、市民社会がこの非人道性をテコに核兵器国に核廃絶の実行を迫っている現状をお話ししました。非人道性については米国も以前からその認識を持っていると話されました。米国のいっそうの努力に期待したいと思います。

戦後我が国は新憲法を制定し、平和主義に徹して70年間の平和を維持することが出来ました。しかし近年、アジアの諸国間での緊張の高まりから、憲法の解釈を変え、集団的安全保障を目指そうとしています。戦後70年にして国民は戦争を可能とする政策変更を是とするかどうかを真剣に考えなければならない岐路に立っています。国民一人一人の責任がいやが上にも増しています。

890余名の御霊の前に、現在までの核兵器の廃絶を目指す世界の動きと、世界で唯一の被爆大学として果たしてきた研究や核廃絶運動、そして日本の社会の変化についてご報告致しました。我々の次の世代においては、ついに、核兵器が廃絶され、みなさまの願いが実現していることを心より願いたいと思います。原爆の犠牲となられた諸先輩のもうしばらくのご加護をお願いしつつ、本日の講話をここで終わります。

第2部

原爆復興70周年記念事業

事業の概要

長崎大学医学部は、安政4年（1857年）オランダ海軍の医官ポンペ・ファン・メールデルフォールトによって、西洋医学の講義が行われて以降、幾多の変遷を経て1923年（大正12年）に長崎医科大学となり、1945年（昭和20年）8月、原子爆弾により壊滅的な状況に陥りました。その後、先輩諸氏の献身的なご努力並びに文部省･関係機関のご尽力により復興し、来る2015年（平成27年）に原爆復興70周年を迎えます。その節目の歳を迎えるにあたり、「原爆復興70周年記念事業実行委員会」を設置し、長崎大学医学部、原爆後障害医療研究所の主催により、原爆復興70周年記念に関する事業を行なう計画を進めてまいりました。

主な事業としては、献花台の設置、写真・資料の展示、記念誌の発行、「原子爆弾救護報告書」の修復などを計画するものであります。

大学は地域との密接な連携の下で発展していくべきと考えております。このため、市民に開かれた医学部を目指す本学部は、長崎のもつ歴史的背景や原爆被爆70周年の歴史も含めて、貴重な医学関係資料を所蔵しておりますので、これらを活用して医学史料展示スペースを設け、学生の教育は勿論のこと一般市民にも開放し、医学関係の歴史などを学んでもらうことも意義あることと考えております。

実施組織

記念事業を実施するために、下記の原爆復興70周年記念事業実行委員会を組織しました。また、委員は長崎医学同窓会、長崎大学医学部を中心に組織していますが、多くの関係団体・各位のご協力をお願いしました。

○原爆復興70周年記念事業会

共同代表：	下川　　功	長崎大学医学部長
	永山　雄二	長崎大学原爆後障害医療研究所長
委　　員：	調　　漸	長崎大学学長特別補佐
	田中　悟郎	長崎大学医学部保健学科長
	黒田　直敬	長崎大学薬学部長
	森田　公一	長崎大学熱帯医学研究所長
	増﨑　英明	長崎大学附属病院長
	三根　眞理子	長崎大学原爆後障害医療研究所客員教授
	青木　克己	長崎大学名誉教授
	蒔本　　恭	長崎県医師会会長
	奥　　保彦	長崎市医師会会長
	朝永　万左男	長崎医学同窓会会長
	岩崎　涼子	長崎医学同窓会事務局
	浦田　秀子	長崎看護学同窓会会長
	山中　國暉	長薬同窓会会長

献花台の設置

原爆投下から70年が経過し、ご遺族の方も高齢化されています。昭和22年、グビロが丘に慰霊碑が建立されて以来、毎年、小高い丘に上ってお参りをされているご遺族の方から、丘に上らずに祈りを捧げられるよう、献花台を設けてほしいという声が医学部長に届きました。

原爆復興70周年を記念して、中庭の長崎医科大学原爆犠牲者名碑の前に献花台を設置しました。

献花台設置

（医学部園芸部「ぐびろ」の企画によりプランターをおきました）

献花をする遺族

平成27年8月9日

被爆遺構の移設

大講堂の玄関は昭和6年の卒業アルバムに掲載（写真1）されています。

玄関には左右に花崗岩の柱がありましたが、原子爆弾により大講堂も全壊し、柱と礎石が残骸となった様子が米国戦略爆撃調査団の撮影フィルムの映像（写真2）に写っています。

現在、柱はグビロが丘の慰霊碑及び薬専防空壕跡の慰霊碑として用いられ、唯一残されていた礎石がグビロが丘へ登る途中に保管されていました。

原爆復興70周年を記念し、原爆犠牲者名が刻まれている銘板の横に移設することとしました。

2015年8月9日

写真1：大講堂

（昭和6年卒業アルバムより）

写真2：大講堂が全壊したあとの礎石

米国爆撃調査団撮影フィルムより
2012年度科学研究費補助金（課題番号24500319
研究代表者大矢正人）の研究成果により作成されたものである

移設された被爆遺構

（献花台近く）

グビロが丘の環境整備

グビロが丘の慰霊碑及び薬専防空壕跡へお参りされるご遺族の方々のために、石段手すりを増設しました。

また、グビロが丘から薬専防空壕跡までの歩道に木製の杭によるロープ柵がありましたが、一部の杭が腐食により倒壊しておりました。腐食をさけるため、金属製の杭によるロープ柵に取り替えました。

さらに、グビロが丘の慰霊碑の文字が色落ちして薄くなっていたため、慰霊碑の洗浄と碑文の彩色を行いました。

石段手すり取り付け（グビロが丘　参道）

ロープ柵取り付け（グビロが丘から薬専防空壕跡まで）

慰霊碑の清掃及び碑文彩色

「原子爆弾救護報告」の修復

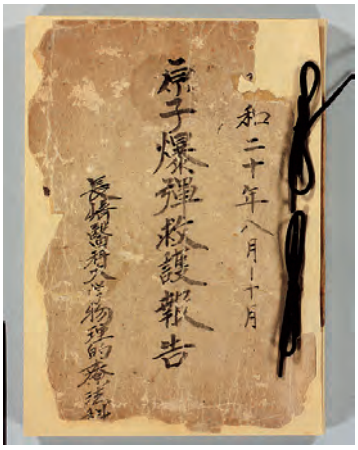
本報告書は原爆から25年経過した1970年に長崎放送の取材の際に、当時三山救護所で永井隆博士から手当を受けた田川福松氏から提供を受けたものである。

報告書は学長に宛てたものであり、被爆直後から救護活動が一応終了した昭和20年10月8日以後にまとめられ、昭和20年末か、遅くとも翌21年1月末ごろまでには脱稿されたと推定される。全182ページにわたり、ほとんどが鉛筆書きである。また、筆跡が一種類でないことから一部は口述筆記の可能性があるが、文章は永井自身のものと思われる。

被爆後70年が経過し、傷みがひどく（修復前の写真）、ページをめくると破れる状況になり、貴重な記録が失われていきつつあった。大学にとって貴重な記録を永久に保存するため、原爆復興70周年記念事業のひとつとして修復が行われた（修復後の写真）。下記の修復の流れにそって、丁寧な作業が行われ見事に修復された。修復は「東京修復保存センター」に依頼した。

なお、複製を作成した。複製は原爆復興70周年記念長崎医科大学原爆被災写真・資料展にて展示し、手に取ってご覧いただいた。企画展示終了後は原爆医学資料展示室に展示する。

修復前



修復後

修復の流れ

1）修復前撮影・劣化損傷記録
2）解体・ドライクリーニング・pH 測定
3）フラットニング
4）補修（本紙・表紙）
5）デジタル撮影
6）リーフキャスティング法
7）乾燥・裁断
8）脱酸性化処理
9）再製本

「忘れな草」復刻版の作成

「忘れな草」の出版の経緯については「忘れな草」の最終号に調 来助先生が執筆されています。以下に第7号よりの抜粋を示します。第1号を1,100部、第2号を800部、第3号を1,300部、第4号を1,000部印刷されましたが、調家に1部残るのみで、すべて絶版となりました。原爆復興70周年を機に、ご遺族の思いが詰まった「忘れな草」全7号の復刻版を作製することになりました。100部作製し、全国の図書館に配布しました。

以下、第7号より抜粋

銅板名碑建立の際に、遺族の方々から寄せられた寄付金に余剰を生じたので、私は遺族の皆様から原爆思い出の手記を書いて頂き、これを集めて小冊子を出版することとした。

私はその小冊子を「忘れな草」と命名したが、漢字で書けば「勿忘草」、英語ではforget－me－not、新版世界大百科事典を繙くと、この草は春から夏にかけて藍青の可愛らしい花をつけ、花言葉は「真の愛」とのことである。原爆の犠牲となった我が子、我が兄弟を忘れず、真の愛の心をもって永く冥福を祈るという意味で命名したと思う。

「忘れな草」は、私（調）が編集を担当し。私の家（長崎市本原町1－29）にある「旧長崎医科大学犠牲学徒遺族会」から発行することとした。

「忘れな草」の本来の使命は、原爆に対する一般の認識を深めるために、愛児を亡くされた御両親の悲壮な思い出を書いて頂くことにあったが、併せて当時の長崎医大の学生達が、どんな状態で原爆の犠牲になったかを、政府当局の方々にも知って頂くように心がけ、それを遺族達に報告することとした。

以上の目的を果たすために、私は色々の資料を集め、一回だけ発行する予定であったが、各方面に多大の好評を博し、手記の寄稿が後を絶たなかったので、昭和43年から52年までの9年間に、6冊を発行するに至った。従ってこれが第7号に該当する。

「原子爆弾災害調査票」の移管

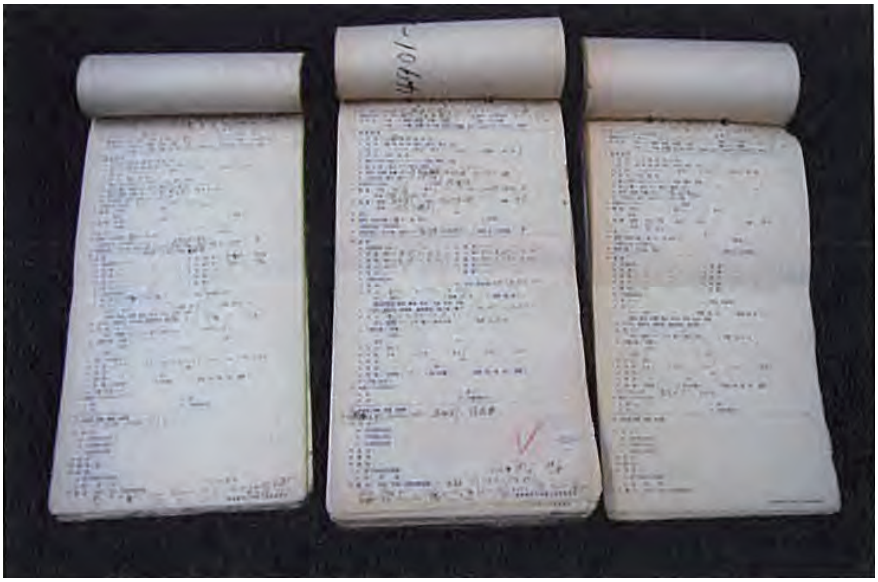
原子爆弾災害調査は、故 調来助（しらべらいすけ）博士（第一外科教授、当時）が中心となり、被爆直後の1945年10月から12月までの3か月間に、原爆の人体への影響を調べることを目的として、数名の教官と約50人の医学生により実施されました。本調査票は当該調査結果の記録原票です。

調査では、5,778人の被災者に対して60項目にわたる聞き取りが行われました。被爆場所、防衛（遮へい）状態、外傷、熱傷に加え、急性放射線傷害でもある下痢、発熱、悪心、嘔吐、出血、口内炎、脱毛などの発症について、時期や継続期間が治療内容と共に記録されています。この調査をもとに被爆距離と死亡および急性症状との関連が分析され、「長崎に於ける原子爆弾傷害の統計的観察」としてまとめられています。

自らも被災した非常時でありながら、患者の救護と原爆被害の科学的解明を目的とした調査を計画、実行した姿勢は、医学を志す学生にとって模範とすべきものです。この証としての当該調査票は本学医学部として貴重な遺品です。

また、本調査で得られた情報の価値も非常に高いものです。調査対象が5,000人を超える大規模調査であること、調査時期が被災直後であること、急性放射線傷害と考えられる症状の聞き取りを医師、医学生が行っていることから、確かな情報として活用できる可能性は高いと考えています。

以上の理由から、原爆復興70周年を機に、長崎大学からの申し出により、本調査票が公益財団法人放射線影響研究所より本学に移管されることとなりました。



長崎医科大学原爆被災写真・資料展

【写真展示】

平成27年７月14日(火)～８月10日(月)10～17時
協賛：(公財)長崎平和推進協会 写真資料調査部会

【資料展示】

前期：７月14日(火)～７月18日(土)10～17時
後期：８月６日(木)～８月10日(月)10～17時

長崎医科大学では学生、教職員あわせて898名が原爆の犠牲となりました。原爆犠牲学徒遺族会会長であった調　来助先生が全員の名前を永久に残すことを提案されました。先生は一人ひとりのお名前を手書きで下書きされ、松岡国一氏の彫刻で名碑が完成しました。昭和42年の原爆犠牲者慰霊祭で除幕式が行われました。被災者のご両親やご兄弟が亡くなられていくなか、原爆の惨事は次の世代にしっかりと語り継がれなければなりません。原爆復興70周年を記念し、長崎医科大学および附属医院の被災写真並びに被災関連の資料を学生、職員、ご遺族の皆さまおよび一般の方々にご覧いただきたく展示いたしました。

原爆被災写真

注：撮影記載のないものは、（公益財団法人）平和推進協会写真資料調査部会提供

江平町上空から医科大学を臨む

江平町一帯（手前）、長崎医科大学（中央）、手前は爆心地

グビロが丘から見た大学構内

グビロが丘（手前高台）。図書館（手前右端）、生化学実習室・薬品庫（中央左）

グビロが丘から附属薬学専門部を臨む

生化学実習室（左端3階建）、中央タンクのある所は、水槽およびポンプ室、その奥は附属薬学専門部

法医学教室から図書館方面を見る

本館倉庫（左）。図書館（中央）。奥はグビロが丘

大学本館から配電室方面を見る

配電室（中央左）

大学本館東側から病理学教室方面を見る

本館倉庫（右端）、病理学教室（左奥）

岩川町上空からの附属医院を臨む

外科病棟

奥の山は岩屋山

小児科病棟
裏門の守衛室（中央手前）

附属医院の南講堂

内科病棟付近

本館（中央左）、内科病棟（右）、売店付近焼跡（手前）

産婦人科手術室一帯

産婦人科病棟（中央左）、同科手術室（中央２階建）。皮ふ泌尿器科病棟（右奥）

眼科病棟一帯

眼科病棟（左端）、精神科病棟（中央高台）、皮ふ泌尿器科病棟（右）産婦人科手術室（右端手前）

外科病棟一帯

外科病棟（左）、産婦人科病棟（右）、中央手前は荼毘（火葬）の跡

内科病棟一帯

内科病棟（左）、耳鼻咽喉科病棟（右）、その間は物理的療法科の焼跡

看護婦寄宿舎（木造）の焼跡

左奥は精神科病棟

耳鼻咽喉科病棟室内

附属医院の一室

2階のレントゲン室と思われる
撮影：松岡静雄（海軍衛生兵として大村海軍病院勤務）

空爆でも被害を受けた耳鼻咽喉科病棟室内

8月初めの空爆でも被害を受けた。原爆とは異なり壁も大きく破壊されている。ボイラー室の煙突が見えている

全壊したベッド

場所は不明

精神科の裏から見た附属医院と医科大学地区

岩川町から見た附属医院

外来と内科（中央）、ボイラー室の煙突と片足鳥居（右手）

グビロが丘から附属医院を臨む

焼け焦げた顕微鏡

場所は不明

図書館の内部

保管されていた図書・雑誌は火災で焼失した

医科大学の講堂

コンクリートの土台を残し木造建物は瞬時に破壊された。左奥は図書館

附属医院の調理部厨房棟

黄色の化粧漆喰仕上げの上に黒の塗料を塗って偽装している。遠くからは灰色に見え、背後の丘陵と混じりあって見えにくくなることを期待したと思われる

グビロが丘の慰霊碑

長崎医科大学のグビロが丘に最初に建立された慰霊碑

撮影：石田寿（長崎原爆資料館所蔵）

野菜畑が美しい1946年の浦上一帯

県立盲唖学校（中央）、常清高等実践学校（左奥）
ヘンショー博士撮影／（公財）放射線影響研究所　所蔵

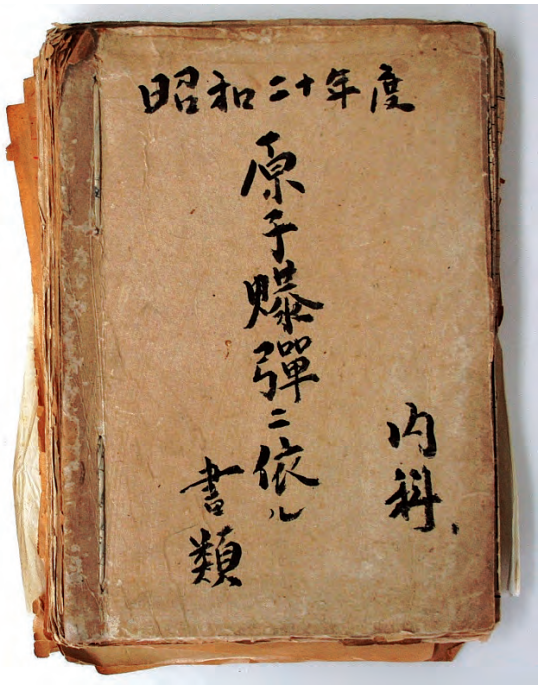
県立盲唖学校と浦上天主堂

中央左が県立盲唖学校、中央のレンガ造りは浦上天主堂と復興した仮聖堂。
右に点在する白い建物は長崎医科大学
ヘンショー博士撮影／（公財）放射線影響研究所　所蔵

原爆被災資料

原子爆弾救護報告

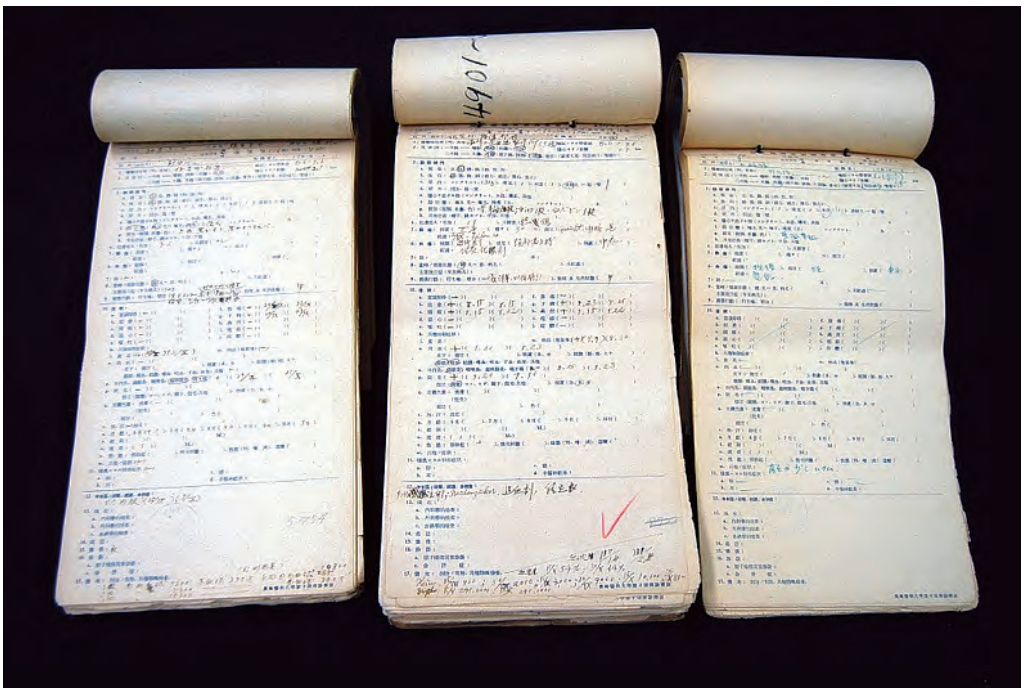
第11医療隊隊長永井隆が学長に提出した報告書。8月12日から2か月間、三山で診療した患者125名の詳細な記録と放射線による病変の特徴や原爆の将来などについてまとめられている



原爆診療録

佐賀県立医療センター好生館で発見されたカルテ

所蔵　佐賀県立医療センター　好生館



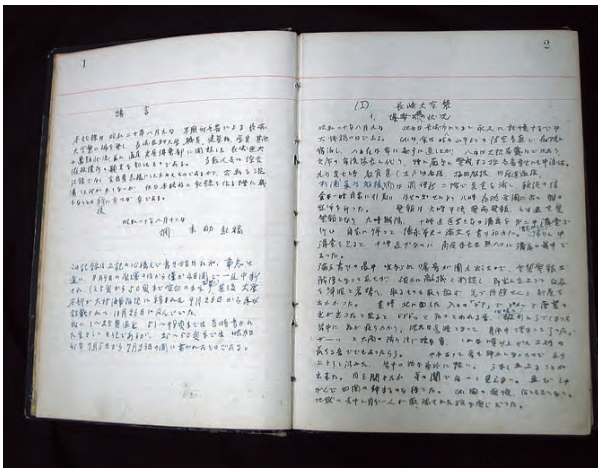
原子爆弾災害調査票

1945年10月から11月にかけて、調 来助 教授を中心に生残りの医局員と学生50人で原爆直後の症状などの聞き取り調査を行った。爆心から3km以内およびその周辺地域の被災者5,778名分で26冊に整理された

長崎に於ける原子爆弾傷害の統計的観察

調来助長崎医大教授が、1945（昭和20）年10月下旬から半月間の調査内容を、その後約1年間かけて執筆したもの。長崎の被爆者を対象にした医学的調査としては、最も早い時期の調査である。英文の抄訳が米軍の医学雑誌「ミリタリーサージョン」に掲載されたが、原文の形では長く未発表だった。1982（昭和57）年、被爆当時の日記とともに「医師の証言 長崎原爆体験／調来助・吉澤康雄」（東京大学出版会）に全文が掲載された

所蔵　調 朝子

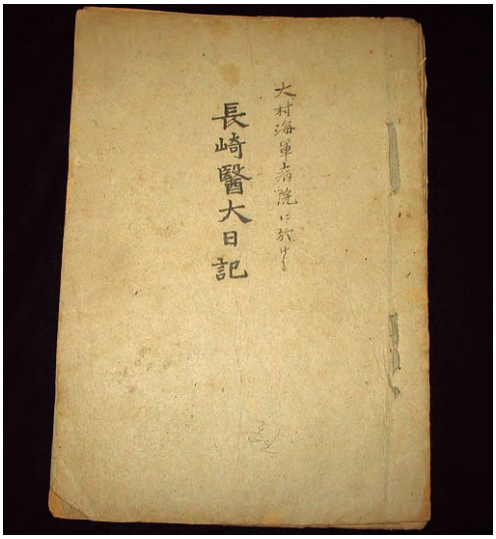


原爆被災復興日誌

第6医療隊隊長調来助が昭和20年8月13日から書き始めた日誌。原爆被災の状況とともに医大復興に奔走したことが詳細に記録されている

「長崎原爆の記録」原稿

泰山弘道著、原稿用紙427枚



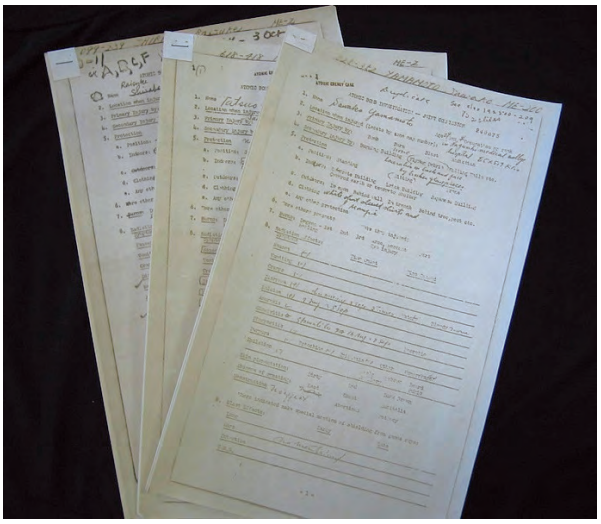
大村海軍病院における長崎医大日記

昭和20年9月24日から12月2日の間の大村海軍病院における長崎医大の医師や学生の日々の行動を週番が記録したもの

巡回診療班カルテ

復員青年医師9名が古屋野学長の許可を得て9月30日から巡回診療を行った。カルテ137枚には被爆距離や白血球数が記録されている

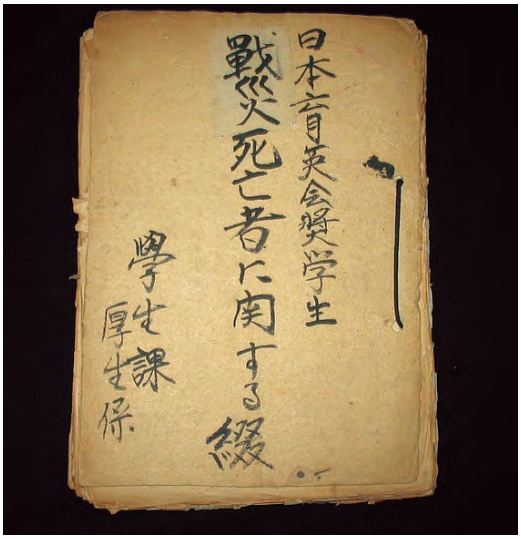
附属図書館医学分館所蔵



日米合同調査団診察記録

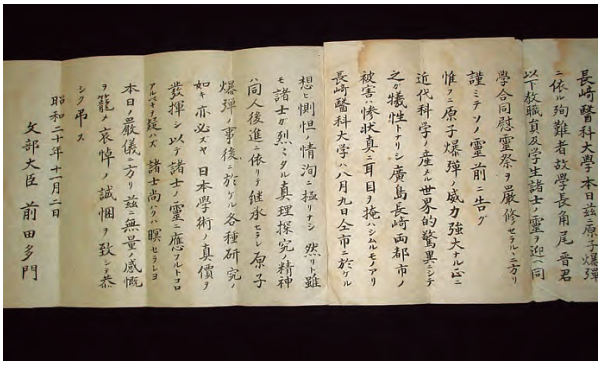
長崎医科大学で被爆した161名の診察記録

附属図書館医学分館所蔵



日本育英奨学金受給者に関する記録

昭和24年2月、学生課で作成された戦災死亡者の育英資金返還の免除願いなどの資料

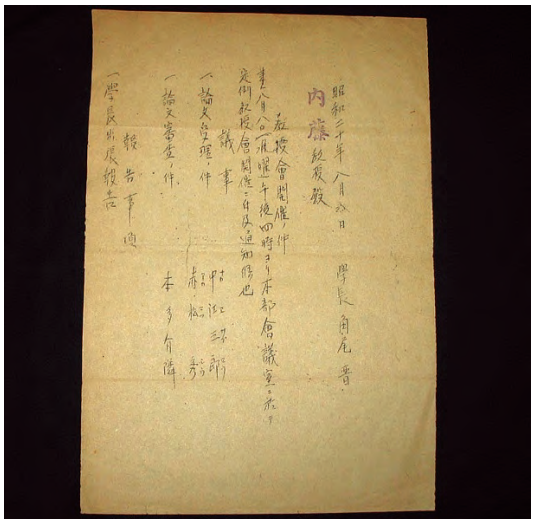


文部大臣の弔辞

昭和20年11月2日、文部大臣前田多門の長崎医科大学の殉難者に対する弔辞

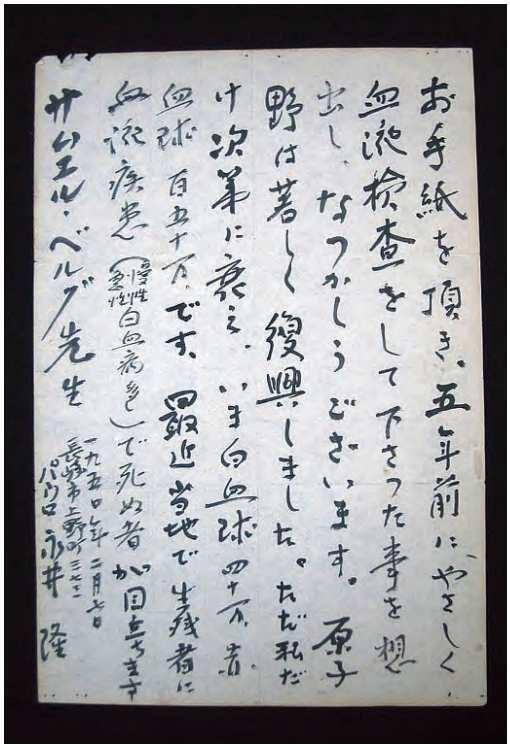
原子爆弾当時の人員一覧表

職員・学生の生存者と死亡者の人数。
職員：生存411名、死亡346名
入院患者及付添人：生存54名、死亡73名
学部：生存189名、死亡146名、不明32名
医専：生存144名、死亡254名、不明26名
薬専：生存171名、死亡40名



教授会開催通知

角尾学長より内藤教授へあてた昭和20年8月8日の教授会開催通知。議事は論文受理と論文審査。報告事項は学長の出張報告

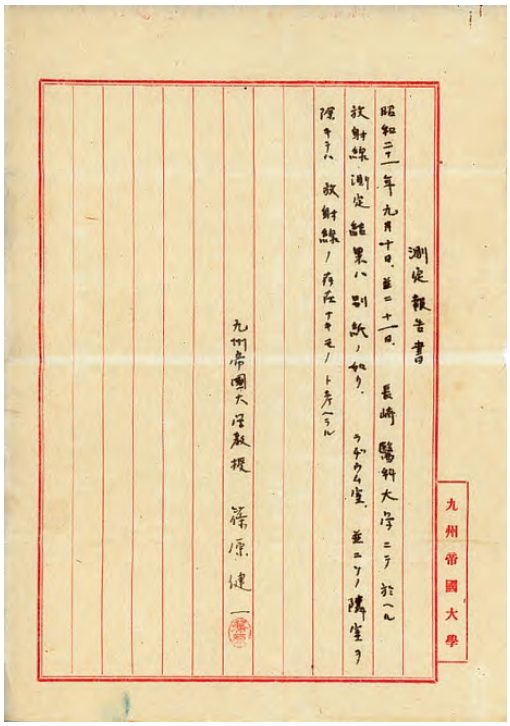


お手紙を頂き、五年前にやさしく
無疵検査をして下さった事を想
出し、なつかしうございます。原子
野は著しく復興しました。ただ私だ
け次第に衰え、いま白血球四十万、赤
血球百五十万です。最近当地で生残者に
血液疾患（特発性白血病多し）で死ぬ者が日毎に
サムエル・ベルグ先生

永井隆博士の私信

1950年2月7日、永井隆がサムエル・ベルグ先生にあてた手紙

米国陸軍病理学研究所返還資料

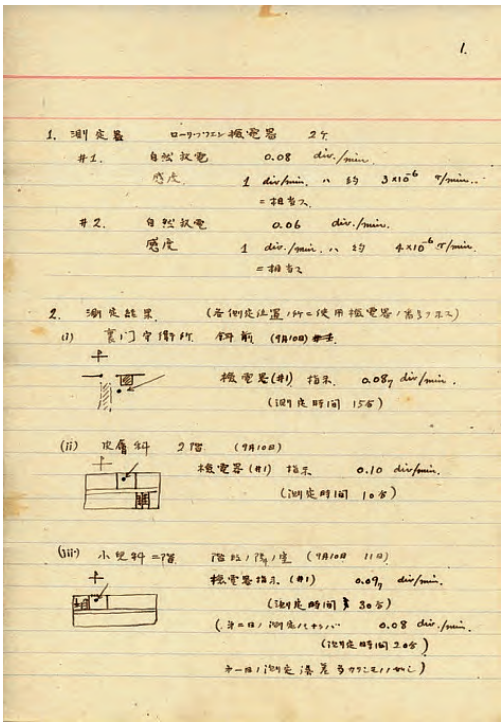


測定報告書

昭和二十一年九月十日、並ニ十一日、長崎醫科大學ニテ於ヘル放射線測定結果ハ別紙ノ如シ。うずのく生、並ニソノ隣生ヲ除キテハ、放射線ノ存在スキモノト考ヘル

九州帝國大學教授　篠原健一

九州帝國大學



1.

1. 測定器　ローターフェレ検電器　2ケ
#1. 自然放電　0.08 div./min.
感度　1 div./min. ハ 約 3×10^{-6} γ/min. ニ相当ス
#2. 自然放電　0.06 div./min.
感度　1 div./min. ハ 約 4×10^{-6} γ/min. ニ相当ス

2. 測定結果　（各測定法ノ所ニ使用検電器ノ番号ヲ示ス）
(i) 裏門守衛所　鉄筋（9月10日）午後
検電器(#1) 指示 0.08γ div./min.
（測定時間 15分）
(ii) 皮膚科 2階（9月10日）
検電器(#1) 指示 0.10 div./min.
（測定時間 10分）
(iii) 小児科 二階 階段ノ隣ノ室（9月10日 11日）
検電器指示 (#1) 0.09γ div./min.
（測定時間 30分）
（第二日ノ測定ハセヌハ 0.08 div./min.
（測定時間 20分）
第一日ノ測定誤差ヲカンガエルベシ）

残存放射能測定報告書

九州帝国大学　篠原健一教授が昭和21年９月に長崎医科大学の放射線測定をおこなった報告書を永井隆が学長宛て報告したもの

附属図書館医学分館所蔵

映画「母と暮せば」公開記念企画展
～今ここにボクがいる理由～　開催にあたって

被爆70年という節目の年。「平和」について改めて考えるよい機会ですが、従来通り正面から対峙する平和教育では、とっつきにくく腰が重いと感じている人は少なくないかもしれません。殊に戦争を体験していない世代においては、大事なこととは感じていても、身近なきっかけがなく改めて真剣に考えるまでに至らないことも多いと思います。

そこで私たち長崎に住む大学生有志は、「平和」を広義の意味で捉え、「日々勉強ができる日常」「大切な人と過ごす温もりに包まれた生活」「生きている今この瞬間」など、平穏な日々が戦争のない平和のもとに成り立っていることを感じる場を提供したいと集まりました。

幸いなことに、山田洋次監督が、ここ長崎を舞台に主人公が旧長崎医科大学（現長崎大学医学部）の学生である映画「母と暮せば」を制作され、2015年12月12日より公開されています。

山田監督も「長崎原爆を次世代に語り伝えたい、残したい」「原爆というものについて今一度考えるきっかけにしたい」という想いを映画に込めているそうです。私たちの想いもそれに似ているものがあると共感し、映画「母と暮せば」を通して、まずは広義の「平和」について考えるきっかけになる場を作りたいという想いで、今回の企画展開催にいたりました。

企画展は2016年1月4日～1月15日まで長崎大学医学部キャンパスの良順会館にて行われました。

映画の世界観を表現しながら、映画の流れに沿った5つのテーマ「被爆前の日常」「1945年8月9日」「3年後」「大切なひと」「おとなの覚悟」で展示を行いました。被爆前後の旧長崎医科大学や長崎の様子がわかる写真、被爆された方へのインタビュー、学生自ら制作した当時の長崎のジオラマ展示、大切なひとに想いを伝えるオリジナルメッセージカードの設置、山田監督をはじめ社会で働く方たちの覚悟や大切にしている想いを知る色紙の掲示、山田監督からのオリジナルビデオメッセージの上映など、学生ならではの視点で、従来の平和教育や講義等とは異なる切り口から「平和」を考える企画展となりました。原爆によって一瞬にして奪われたものは「特別なものではなく私たちと同じ日常であった。」ということを、来場者の皆様が感じてくださっていると嬉しいです。

私たちの企画展は終わってしまいましたが、改めて平和教育について考えるきっかけや、今のかけがえのない日々を大切に生きようと思うきっかけとして、この企画展が少しでも心に残る存在であればと思います。多くの方にご来場いただきまして、誠にありがとうございました。また、改めまして、本企画にご賛同頂き、ご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

長崎被爆70年学生企画　学生実行委員会

報　道

来月、初公開へ

原爆投下直後の被爆者調査票

放影研から長崎大に移管

被爆70年 ナガサキ

長崎原爆投下直後の1945年10～12月、長崎医科大（現長崎大医学部）の医師や医学生約50人が被爆者から症状などを聞き取った「原子爆弾災害調査票」が7月、長崎市坂本1丁目の同大医学部で初公開される。日米合同の研究機関、放射線影響研究所（放影研）が保管しているが、被爆70年を期に同大に移管する。

学生・教職員898人が原爆の犠牲となった長崎医科大。当時の第一外科教授で、被爆者の治療と後障害の研究に力を尽くした故調来助長崎大名誉教授が中心となって統計的調査を実施した。氏名、生年月日、被爆場所、症状など約60項目を記録した5778人分の調査票が計26冊に分けられている。

5778人分 統計的観察

調査を基に調氏は4編の論文「長崎に於（お）ける原子爆弾災害の統計的観察」をまとめ、爆心地からの距離、脱毛など急性症状の発生状況、年齢）との死亡率などを統計的に明らかにした。

調査票は51年、放影研の前身である原爆傷害調査委員会（ABCC）に寄託。90年に調氏の遺族が放影研に寄贈した。傷みが激しいため、放影研と長崎大が2004年に複製を作製し、同大原爆後障害医療研究所（原研）原爆医学資料展示室で展示している。

調査票の公開は同大の原爆復興70周年記念事業の一環。7月14～18日と8月5～10日、佐賀県医療センター好生館で見つかった被爆者のカルテなどとともに医学部基礎研究棟ロビーで展示する。8月9日に開く原爆犠牲者慰霊祭で放影研から正式に移管され、大学側は詳細な分析を検討する。

記念事業ではこのほか、長崎医科大第十一医療隊長だった故永井隆博士が被爆直後の救護活動を克明に記録した「原子爆弾救護報告」を修復、展示。医学部敷地内に建立された原爆犠牲者の銘板前への献花台設置や、学生らの遺骨が埋葬されている通称「グビロが丘」の環境整備などに取り組む。（蓑川裕之）

長崎新聞　2015年6月20日

被爆直後のカルテ展示

佐賀で発見 長崎大、調査票原本も

戦後70年

長崎大医学部で展示が始まった被爆者のカルテ

佐賀市の旧佐賀県立病院好生館（現佐賀県医療センター好生館）で見つかった、長崎と広島の被爆者計75人分のカルテなどを展示する「長崎医科大学原爆被災写真・資料展」が14日、長崎市の長崎大医学部基礎研究棟1階ロビーで始まった。

カルテは2011年に好生館で見つかり、今年6月に公表された。表紙には「原子爆弾ニ依ル書類」と書かれており、同年8～9月の男女の来院経緯や白血球数、治療内容などが日本語とドイツ語で記されている。

同大医学部の前身、長崎医科大は1945年8月9日の原爆投下で学生や教職員898人が犠牲となった。原爆の惨事を次の世代に伝えようと、医学部関係者らでつくる実行委員会が企画し、カルテを好生館から借用した。

このほか、被爆者救護に尽力した医師の調来助長崎医科大教授（1899～1989年）が中心となり、1945年10～12月に5778人に被爆場所や症状などを聞き取った「原子爆弾災害調査票」の原本や被爆直後の長崎の写真など約50点を展示。調査票の原本の一般公開は初めて。

14日に行われたオープニングセレモニーには、長崎大の片峰茂学長ら関係者約40人が出席。片峰学長が「原爆投下と復興は長崎大にとって忘れてはいけない記憶。今回の展示は（当時の状況を伝える）意味ある展示だ」と祝辞を述べた。

資料展示は14～18日と8月6～10日、写真展示は同月10日まで。午前10時～午後5時。問い合わせは長崎大医歯薬学総合研究科総務課（095・819・7004）へ。

読売新聞　2015年7月15日

原爆投下直後の被爆者調査票やカルテ

被爆70年ナガサキ

長崎医科大の資料紹介

貴重な48点、展示始まる

被爆70年に合わせ、原爆で学生・教職員898人が犠牲となった長崎医科大（現長崎大医学部）の関連資料を紹介する展示会が14日、長崎市坂本1丁目の同学部基礎研究棟1階ロビーで始まった。同学部関係者らの「原爆復興70周年記念事業実行委」主催。1945年10～12月、被爆者5778人から長崎医科大医師らが症状などを聞き取った「原子爆弾災害調査票」を初公開している。

同調査は、故調来助長崎大名誉教授が中心となり実施。爆心地からの距離、急性症状の発生状況、年齢ごとの死亡率などを統計的に明らかにした。日米合同の研究機関、放射線影響研究所が保管しているが被爆70年を期に同大に移管する。

初めて公開された原子爆弾災害調査票に見入る来場者＝長崎大医学部（濱崎武撮影）

会場には、佐賀県医療センター好生館で見つかった被爆者のカルテなど資料16点、廃虚となった講義室や焼け焦げた顕微鏡など写真32点を展示。期間は14～18日と8月6～10日。午前10時～午後5時。無料。

開会行事には、片峰茂学長や調氏の次女、朝子さん(83)ら計約50人が出席。実行委員の永山雄二・同大原爆後障害医療研究所長が「原爆の悲惨さと貴重な記録資料の存在をあらためて確認していただければ」とあいさつした。

（蓑川裕之）

長崎新聞　2015年7月15日

原爆直後6000人の調査票

被爆状況・健康状態…60項目質問

調博士の分析資料、長大で展示

被爆者救護に力を尽くした長崎医科大（現・長崎大医学部）の調来助博士（1899～1989）の調査班が1945年10～12月に、長崎の被爆者らの被爆状況や健康状態などについて、約6千人から聞き取った調査票が、放射線影響研究所（放影研）から長崎大に移管された。14日、同大医学部で展示が始まった。

原子爆弾災害調査票を見る調朝子さん（右）ら＝長崎大

同大によると、調査は調博士や教官、学生ら約50人で実施。爆心地から約3・5キロまでの範囲で被爆した5778人に、屋内にいたか外にいたか、爆心地方向から遮るものがあったか、といった被爆状況に加え、意識障害やめまい、頭痛、吐き気などの症状の有無など60項目について質問した。

調博士は、診療のかたわら、1人で1年がかりで統計的に分析。原爆症の初期症状について、吐き気は被爆直後から翌日までに多く、下痢は当日から1週間以内が大部分、脱毛は通常2、3週間後に起きたことなどを導き出した。

こうした結果については、論文として発表されることはなく、82年になって東大教授との対談をまとめた本に収められた。放影研によると、調査票は保存のため51年に原爆傷害調査委員会（ABCC）に移され、調博士の死後、90年に遺族から放影研に寄贈された。被爆70年を機に同大に移管された。

展示の開会式典に出席した調博士の長女、調朝子さん(83)は「父は一軒一軒訪ねて研究していた。家族は父の体のことを心配した」と振り返った。

同大原爆後障害医療研究所の三根真理子教授は調博士について、「原爆のことを明らかにしようという使命感があった。大学自体が壊滅した中、こんな調査がなされていることがすごい」と話す。

調査票は18日までと8月6～10日の午前10時～午後5時、長崎市坂本1丁目の同大医学部基礎研究棟1階ロビーで展示される。米国立公文書館に保管されていた、長崎医科大の講義室がコンクリートの土台だけになっている写真など、被災直後の写真も展示されている。

（岡田将平、八尋紀子）

朝日新聞　2015年7月15日

【テレビ報道】

報道日	テレビ局	タイトル
2015年7月14日	KTN	長崎大学で原爆被災資料の展示
2015年7月14日	NHK	長崎大　被爆直後の調査票展示
2015年7月14日	NCC	長崎医科大学原爆被災写真・資料展始まる

映画「母と暮せば」公開を記念

若者が平和考える場を

写真などで被爆前後の様子伝える　長大医学部 15日まで

長崎原爆を題材にした映画「母と暮せば」の公開記念企画展が4日、長崎市坂本1丁目の長崎大医学部良順会館で始まった。被爆前後の写真や映画のシーンを収めたパネルなど約90点を通し、被爆前の日常から原爆投下後の長崎の暮らしを伝えている。15日まで。

同学部の学生ら約30人でつくる実行委が主催。映画の主人公の息子が旧長崎医科大（同学部）の学生だったストーリーに合わせ、若者が平和について考える場を提供しようと企画した。

原爆投下前の長崎・東山手から見た長崎港や、原爆で壊滅的な被害を受けた旧長崎医科大の写真、昭和20年代の長崎市の地図を基に作製した被爆当時と現在の長崎の様子を伝えるジオラマなどを展示。レコードなどの映画の小道具、山田洋次監督のメッセージ映像、アニメーション背景画家の男鹿和雄さんが本展向けに手掛けた被爆マリア像などのイラストもある。

4日、劇作家の故井上ひさしさんの三女で劇団こまつ座社長の井上麻矢さん（48）らが講演。麻矢さんは「大事な人に私たちが何を残していくのか、考えてほしい」と語った。

また映画と対になる井上さんの舞台「父と暮せば」を9～11日の各日午後2時、同会館で上演予定。整理券（200枚）を当日午前9時より配布する。

（白石彩乃）

昭和20年代の地図を基に制作したジオラマを眺める来場者　＝長崎市、長崎大医学部良順会館

長崎新聞　2016年1月5日

過酷な体験　次世代に語る

江口 淳二さん　1926年生　1

県内の学生らが企画し、15日まで長崎大坂本キャンパス（長崎市坂本1丁目）で開催中の映画「母と暮せば」公開記念企画展で被爆者5人の体験が紹介されている。同大で被爆した人や今の学生と同年代だった人たちだ。企画にあわせ、学生たちが聞き取りをした。

その中に、諫早市飯盛町の江口淳二さん（89）の体験もある。長崎市平戸小屋町（現・丸尾町）の三菱電機で被爆したこと、対岸から同市五島町の家付近が焼けるのを見ていたこと、救護隊にいて幾人もの遺体を焼いたこと。「人の命は鴻毛（おおとりの羽毛）よりも軽い」という言葉が当時の状況を示す。

江口さんは、こうした体験を公に語ることはなかった。だが、近年、次世代の人たちに求められ、過酷な体験を語るようになった。私も話を聴かせてもらい、同時に、江口さんの話に耳を傾けた人たちにも取材した。被爆70年が過ぎた今、声が小さくなっていく被爆者の体験から何を学べるのか、改めて考えたいと思う。

（岡田将平・34歳）

上 江口淳二さん＝諫早市飯盛町
下 江口さんの体験を聴き、展示でまとめた（左から）淵ルリ子さん、柏原由紀乃さん、萩彩乃さん＝長崎市坂本1丁目

ナガサキノート

朝日新聞　2016年1月15日

編集後記

原爆復興70周年を記念して、長崎大学、長崎医学同窓会、長崎市医師会、長崎県医師会、長崎看護学同窓会、長薬同窓会にて、原爆復興70周年記念事業実行委員会が組織され、多くの組織や個人の方にご支援いただき、記念事業を実施しました。事業を終えるにあたって、集約として本冊子を作成いたしました。事業については本冊子に報告しております。

長崎医科大学関連の被災写真展は、（公財）長崎平和推進協会写真資料調査部会 部会長の深堀好敏氏のご賛同とご協力を得て、長崎医科大学の被爆写真を展示いたしました。2014年に米国立公文書館で新たに入手された珍しい写真も展示できました。

今回の事業で何よりも喜ばしいことは、学生への継承を願った下川医学部長のお気持ちが学生に伝わり二つの事業参加があったことです。一つ目は、写真・資料展の案内です。「やってみゅーデスク」を通じて案内ボランティアを募集し、長崎純心大学の学生や留学生を含む本学の学生に協力していただきました。医学部からは野球部の参加がありました。園芸部「ぐびろ」は、医学部玄関と献花台周りにかわいい花を飾り付けました。彼らが心を籠めて折った千羽鶴は、旧長崎医科大学正門横に飾りました。二つ目は、70周年記念として山田洋次監督の映画「母と暮らせば」が製作され、12月に公開されました。長崎医科大学の原爆犠牲学徒を主人公として描かれたものです。これを受けて医学部、他学部、県内大学の学生で結成された長崎被爆70年学生企画実行委員会が2016年1月4日から1月15日にかけて映画「母と暮らせば」公開記念企画展を開催いたしました。700人を超える来場があったと聞いています。学生のアイデアと多くの方々の多大な協力のもと、工夫を凝らした素晴らしい企画展でした。このような積極的な学生達が、世界で唯一の被爆医科大学としての歴史を継承していくことでしょう。

三根眞理子、平山　忠

原爆復興70周年記念誌

－ 証言　長崎医科大学 －

2016年 1 月25日

編集・発行　原爆復興70周年記念誌事業実行委員会

〒852-8523　長崎市坂本1丁目12の4
TEL 095-819-7004

写 真 提 供　（財）長崎平和推進協会写真資料調査部会　長崎原爆資料館

印　　刷　株式会社 インテックス
〒850-0046　長崎市幸町6-3
TEL 095-826-2200